ヴァンパイアif

小野　大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴァンパイアｉｆ

【Ｎコード】
Ｎ６４６３Ｚ

【作者名】
小野　大介

【あらすじ】
ハロウィンの夜、四人の若い男女が街外れにある古城に忍び込んだ。未成年にもかかわらず、酒やタバコを飲み、しまいには麻薬にまで手を染めてしまう。気分が高揚し、傍若無人な振る舞いをしだす若者たち。そんな若者たちを、暗闇から見つめる二つの光があった。赤いそれは、瞳……。

プロローグ

「トリック・オア・トリート！」

オバケのような怖い顔を模してかたどられた、オレンジ色のカボチャのランタンが飾られているとある民家の玄関扉を前にして、思い思いの怪物に変装した子供らが大きな声で合唱した。

ホラーものの映画では定番のゾンビから、魔女、狼男、それにフランケンシュタインと、様々な怪物に変装した子供らは、その手に大きなかごを抱えて、待ち構えている玄関扉のガラスの向こうに人影が見えるや否や、曇りのないその瞳を輝かせた。

「トリック・オア・トリート！　お菓子をくれなきゃイタズラするぞぉ！」

扉が開いて、一人の婦人が子供らを出迎える。すると、子供らはまた合唱を。

「あらあら、イタズラをされては困るわ。お菓子をあげるから、許してちょうだいね」

イタズラするぞと脅されているのに、婦人の顔には笑みが。なんだか嬉しそうである。そんな彼女の手には、いくつかのお菓子がまとめられた小さな包み紙が山とある。婦人はそのお菓子入りの包み紙を、子供ら一人一人のカゴに一つずつ入れてやった。

「ありがとう！」

お礼の言葉を残し、子供らは笑顔で駆けていった。

１０月３１日――今宵はハロウィンだ。

子供らが思い思いの怪物に変装して街をねり歩き、家々を回っては、イタズラするぞと脅してお菓子をもらう。今日ばかりは“いくらでもお菓子を食べられる日”と、子供らは誤解しているかもしれないが、もちろん違う。

本来、ハロウィンというのは、キリスト教、カトリックの諸聖人の日（万聖節）の前晩、１０月３１日に行われる伝統行事である。

ハロウィンとは元々、カトリックに伝わるものではなく、その昔、ケルト人と呼ばれる種族がいて、そこが発祥とされている。
ケルト人たちは、この日、死者が家族の元を訪ねたり、精霊や魔女が出てくると考えていた。その死者などから身を守るため、彼らは仮面をかぶり、焚き火を焚いていたとされ、それがいまのハロウィンの始まりだと考えられている。
これは余談だが、日本の伝統行事にお盆というものがある。お盆では火を焚き、死者を迎え、そして、送るといった風習がある。迎え火、送り火と呼ばれるその風習だが、ケルト人のそれにどことなしか似てはいないだろうか？　しかし、死者を迎え入れるお盆と、死者から身を守ろうとするハロウィンでは、根本が違っているとも言えるだろう。
「――トリック・オア・トリート！」
子供らがまた別の民家の玄関扉の前に集まり、合唱する。……しかし、応答がない。
「トリック・オア・トリート！　お菓子をくれなきゃイタズラするぞぉ！」
子供らはもう一度合唱するが、やはり応答はなかった。すると、子供らはその目をキラリと輝かせて、お菓子の入っているかごの中からなにかを取り出した。
「イタズラしちゃえ～っ！」
子供らの手にあるのはラッカースプレー。それを両手に構えると、子供らは一斉に散らばり、応答のなかった民家の玄関扉や壁にラクガキを始めた。
「逃げろ～！」
民家の扉や外壁をカラフルな色に染め上げると、子供らは蜘蛛の子を散らしたように、あっという間にいなくなってしまった。
「――あーあ、あそこ、やられてるよ」
窓越しにその一部始終を眺めていた近所の住人は笑みを浮かべていた。

「お留守なのかしら？」
「きっとそうだろう。帰ってきたら驚くぞ」
「そうね。でも、いいじゃない。洗えばすぐに落ちるんだから」
「それはそうだが――」
「トリック・オア・トリート！」
「おっと、うちにも来たぞ。イタズラされないようにお菓子をあげないとな」
　他人事のように眺めて楽しんでいた住人も、その声が聞こえると、あらかじめ用意してあったお菓子を抱えて玄関へと急いだ。
　彼らの話にもあったように、子供らがイタズラに用いているあのラッカースプレーは、ハロウィンのために作られた、いわゆる、ジョーク商品というものだ。水をかけるだけで簡単に洗い流せる代物である。お菓子をくれないような大人気ない大人に子供らが制裁を加えるためのもので、けれど、他愛もない無邪気なイタズラだから、叱るものなどいない。叱ろうものなら、この日ばかりは逆に叱り返されてしまうだろう。……しかし、ときには例外もある。些細なイタズラも、度が過ぎればもはやイタズラでは済まされない。そう、彼らのように……。
「――ヒャッハァ～ッ！」
　飲み干して空になった酒瓶を、少年は勢いよく壁に叩きつけた。酒瓶は音と共に砕け、細かいガラスの破片となって辺りに飛び散った。
「なあ！　次はこれを入れてみようぜ」
　空になった酒瓶を手にしたもう一人の少年が、その中になにかを入れた。大量のかんしゃく玉だ。その上からスコッチなどのアルコール度数の高い酒を注ぎ入れ、口に布きれを差し込み、簡易の火炎瓶を作ってしまった。少年はへらへらと笑いながらライターで火をつけ、壁に向かって投げつけた。壁に当たって瓶が割れた途端、酒に引火して燃え上がり、かんしゃく玉が騒音と共に弾け飛んだ。
「キャハハッ！　きれいきれい！　花火ね！」

少年らのかたわらには少女が二人。少年らがふざけて投げつける酒瓶の激しく砕け散る様子に、少女らは嬉しそうな声を上げている。未だに青い炎が燃えている石の壁を眺め、楽しそうに手を叩いている。

ハロウィンで盛り上がりを見せている街の外、針葉樹林を抜けた先に広大な草原がある。煌々と輝く半月の青白い光に照らされたその草原に、ひっそりと佇む古い城があった。

淋しげにぽつんと一つだけそびえ立っているその古城の中庭の一角が、ぼんやりとした明かりに照らされている。それは焚き火の明かり。少年少女と呼ぶには少々歳を取り過ぎている彼らが無断で忍び込み、そこらにあった枯れ木などをかき集めて燃やした焚き火の明かりである。

少年少女のこの四人組は、ハロウィンだからといって、肝試しも兼ねてここに集まった。私有地である古城の中庭に無断で侵入し、持ち寄ったお菓子を食い散らかす。未成年だというのに酒をかっ喰らい、煙草は吸う、麻薬には手を染める。気分が高揚したのか、飲み干して空になった酒瓶を壁に叩きつけて遊び始め、花火まで持ち出し、中庭にある噴水に小便をしたり、中庭に残されてあった彫刻や石像を蹴って破壊したりと、まさにやりたい放題。傍若無人の振る舞いである。

ハロウィンは死者が家族の元を訪ねたり、精霊や魔女が現れると云われる不思議な日。人々の心もついつい浮き足立ってしまうゆえ、良心や正義感などによる歯止めが利かなくなってしまう者が多くなる日でもある。だが、それにしてもひどいものだ。彼らのそんな姿はまるで、ハロウィンに現れるという精霊や魔女にでも心を操られてしまったかのよう。

「アハハ、楽しい！　――あー、喉渇いた」

笑い疲れてしまったのか、少女の一人が手元に置いてあった酒瓶を取る。だが、中身はすでに空。少女はまだあったはずだと辺りをキョロキョロし、後ろを振り返った。すると、目の前に求めていた

酒瓶が現れた。
まだ栓が開いていない酒瓶が二本、闇の中に浮かんでいる。
「あー、ありがとぉ！　……あれぇ？　どうして浮かんでるの？」
二本の酒瓶のうちの一本が、ひとりでに少女の手の中に。受け取った少女はお辞儀でもするかのようにかくりと頷いた。しかし、ふと疑問に。
「どうしてぇ？　変なのぉ？」
酔っ払い、麻薬に溺れた少女の思考は正常とはほど遠い。考えたところでまとまらず、それを知ってか知らずか、少女はすぐに考えるのを諦め、まるでマジックショーでも見ているかのように楽しんでいる。
「不思議！　ほらほらぁ、皆、見て見てぇ！」
少女は前に向き直し、皆に呼びかけた。
「ねぇー、浮いてるのぉ！　ほらぁ――」
すぐ目の前に見知らぬ人物が立っている。少女が、正常とはいえない状態の思考ながらそう判断したそのとき、闇の中から、ぬっと二つの手が現れて、彼女の両肩を掴んだ。
「ハアァ……ッ！」
青白い顔が少女の目の前に迫る。死人のように青白い顔。白く染まった吐息を吐き出すその口元には、白く輝く四本の牙が……。
血に染まったかのような赤い瞳が、じろりと少女を睨みつけた。
「ひ……っ！」
びくりと震えて、急に息を吸い込んだように、少女は悲鳴を詰まらせた。
「うっ、うわっ！」
「キャアッ！」
少女の代わりとばかりに、後ろの三人が声を上げた。
「きゅっ、吸血鬼だ……本当に、吸血鬼が出た！」
「やべえよ……逃げろ！　おい、逃げろっ！」
少女を助けようともせず、三人は一目散に逃げ出してしまった。

「み、皆……まっ、待って……」
少女が手を伸ばして助けを求めても、三人は一度として後ろを振り返ろうとはしない。あっという間に見えなくなった。
「いやあ！」
逃げ出そうともがくも、酔いが回った身体に力が入らず、また、両肩を掴んでいる手の力はなんとも強くて、いくら振り解こうとしてもびくともしない。
「ひぃいいい！」
恐ろしさのあまり、少女はついに泣き出してしまった。震え上がり、失禁してしまった。
「……」
すると、そんな少女を捕らえて放さず、睨みつけていたそれは、すっとその青白い顔を遠ざけた。しかし、まだ赤い瞳と、獣のような鋭利な瞳孔で少女を睨んではいる。
そのとき、欠けた月が雲に隠れ、世界は一変した。
闇に、赤い瞳だけがらんと輝いている。
その瞳に魅入られてしまったように視線を外せないでいる少女は、身を守るように手を突き出して、懇願するように語りかけた。
「た、助けて……」
闇で見えず、憶測を誤ったのか、彼女の手がほんのちょっと触れてしまったその途端、それはびくりと身を震わせて、目の色を変えた。
「カァ――ッ！」
口を引き裂けんばかりに大きく開き、四本の牙をあらわにすると、少女の両肩をぐいと引き寄せ、その青白い顔を彼女の首元に埋めた。
「いっ、いやあああああああっ！」
少女は闇夜を切り裂かんばかりの悲鳴を上げた……。
断末魔の叫び声にも聞こえるその悲鳴は、古城から遠く離れていた三人の耳にも届いた。彼らはいま、草原を駆け抜けている。

「確か、吸血鬼に咬まれたら、その人間も吸血鬼になるって……」
足を止め、少年の一人が仲間の顔を見やる。
「じゃあ、あの子……」
いまにも泣きそうな顔をし、少女は消え入りそうな声でそう問いかける。
「とにかく逃げるんだ！　逃げるんだよ！」
もう一人の少年が声を荒げて、一度は止めた足を動かした。
三人は草原を駆け抜けて、林の中へと飛び込んだ。……しかし、すぐに足を止めた。
誰かがいる。
「だっ、誰だ……！？　誰だよ、そこにいるの！？」
少年の声に後ろの二人も身構える。すると、それを見越したように、正面に見えている木々の間から、それは現れた。
大きな十字架――
「え！？」
三人は驚いた。思わぬものを見てしまったからだ。が、その驚きはすぐに意味を変える。雲に覆い隠されていた月が再び姿を現し、その青白い光に照らされ、十字架はより鮮明なものになった。
「うわあっ！」
三人は大声を上げた。飛び上がらんばかりに驚いた。何故なら、その十字架は、二つの人影が重なってそう見えていただけだったのだから。
そのうちの一つは、彼らが置き去りにしたあの少女だった。
少女の身体が宙に浮かんでいる。横たわったように浮かんでいる。
いや、違う。浮かんでいるのではない。抱きかかえられているのだ、その後ろに立つ、もう一つの人影の腕の中に……。
月明かりに照らされて、赤い瞳が浮かび上がった。
「きゅっ、吸血鬼……」
誰かがそう呟いた。
「咬まれてる！　あの子、咬まれてるよぉっ！」

少女はなにかに驚いて声を上げた。腕を伸ばし、抱きかかえられている少女を指差す。
首元に、細い二本の赤い筋が……。
少女を抱きかかえていた人影は、唇の両端をにっと吊り上げた。わずかに開かれたその口元から牙が垣間見える。その牙は赤く染め上げられていた。
「ひぃ――」
誰かが悲鳴を上げようとしたその瞬間、それは牙を剥き出し、少女を腕に抱いたまま、目にも留まらぬ速さで三人の目の前に迫った。悲鳴が上がった。金切り声にも似た複数の悲鳴が……。

今宵はハロウィン。
人に在らざるものが、月下を闊歩する日。

（1）

針葉樹林の中を縫うように伸びている二車線の道路。その片側を一台の車が走っている。丸っこい形をした小型のグリーンのクラシックだ。

「どこまで続くのよ、この林……」

プラチナブロンドの少女は、目鼻立ちのしっかりとした美しい顔には似合わないしわを眉間に寄せている。ハンドルを握ったまま、両手を突き出すように伸ばし、長時間、同じ姿勢でいて凝り固まってしまった身体をほぐさんと伸びをした。いますぐにでもハンドルから手を離し、全身を、これでもかと伸ばしたいところだが、そんなことをすれば惨事になってしまう。などと、どうでもいいようなことがふと思い浮かんだ少女は、そんなくだらない考えを振り払わんとかぶりを振った。すると、車が少し左右に揺れた。

車に乗っているのは彼女だけ。助手席にも後部座席にも、乗っているのは荷物ばかり。助手席に、革製の使い古されたアタッシュケースが置かれてあるのだが、シートベルトでしっかりと固定されている。それだけは何故か、さも同乗者のような扱いを受けていた。大切なものなのだろうか？

そのアタッシュケースの角に名前を書くスペースがあるのだが、そこに英語でレインとだけ書かれてある。

レインは、長時間の運転と、車での移動にいい加減うんざりしていたところに、この、見上げるばかりの背の高い針葉樹しか見えない林道。景色といえば木か、真っ直ぐな道路のみ。それまでは見ることが出来ていた清々しいまでの青空も、頂上に積もった雪の白と、青みを帯びた岩肌の二色のコントラストが美しい山脈も、緑豊かな広大な大地も、まるで見えなくなってしまった。美しい風景が見られなくなったことで、彼女の心には小型車の上にクラシック、びっくりするほど狭い車内に対する不平不満がぶり返していた。

どうして、こんな車を支給したのよ……！？
レインは声を大にしてそう叫びたいという欲求と衝動に駆られていた。それに加えて、この車にはステレオもなければ、最後の希望というべきラジオも壊れており、音楽も聞けない有り様。彼女が苛立つ理由も分かる。しかし、それが彼女を苛立たせている主な理由ではなかった。彼女が苛立っている真の理由は、今回任された仕事に対する激しいまでの緊張と、大きいまでの不安と恐怖。そして、わずかな焦りである。
「チィッ」
レインは軽く舌を打ち、ギリリと親指の爪を噛んだ。
「木……木……木……、ああもう、うっとうしい！」
レインははやる気持ちを抑えられないのか、流れゆく景色に苛立ちをぶつけた。
レインは、イギリスの首都ロンドンにある自宅を出発し、北を目指して延々と車を走らせていた。半日はとうに過ぎ、しばらくすれば丸一日になろうとしている。彼女が目指しているのは、ロンドンから北の、イングランド北部にある田舎町だ。
街の名はアルフレディア。
助手席の足下に落ちている資料によれば、さほど特質したところはなく、観光地も古い時代に建築された教会や寺院、それに古城があるばかりで目新しさもなく、美味い料理を出す店などがいくつかピックアップされてはあるが、星を持つような店もなく、高が知れている。これといった特徴のない、どこにでもある田舎町だ。ただ一つ、古来より吸血鬼伝説があることを除けば、だ……。
林道を走ってそろそろ一時間になるだろうか。いまちょうど、フロントミラーに見えている山の上を走っていた頃に、チラリとだが垣間見えた街並み。それがそろそろ見えてもおかしくはない位置の辺りを走っているはずなのだが、まだのようだ。……と、そのときである。
進行方向に見えたものに、レインは我が目を疑った。

「……こんなところで、渋滞？」
目の前に数台の車の列が。レインは、前の車に合わせるように、そっとブレーキを踏み込んだ。前の車の後ろにピタリと停まった。
「ああ……そう、ここなのね」
渋滞の原因はすぐに分かった。車が行列を作っているそのかたわらに人だかりが出来ている。その一角に、警察が事故や事件のあった現場を封鎖する際に用いる立ち入り禁止と書かれたテープが張られている。
行列の原因は、その様子を、運転手が車を停めて見物していたためだった。
渋滞は動く様子がない。しかし、行列はほんの数台だけ。仕方がないと、レインは一度車をバックさせて、前に停まっている車を追い越し、その先の何台かも追い越し、行列を越えた先の路肩にあらためて車を停めた。
エンジンを切り、ドアを開けて外に出た途端、レインの吐く息が白く染まった。冷たい風に吹かれ、レインは思わず身震いしてしまう。
十一月――
だいぶ寒くなってきた。イギリスの冬は特に寒い。冬まではまだ、若干の間があるが、今日は特に冷える。地方というのもその一因なのだろうが、真冬並みの寒さだ。
レインは車を降りる際、後部座席に置いてあった白のダッフルコートを急いで羽織り、前をしっかりと留めた後に、人だかりへと歩き出した。
「ここから先には入っちゃいかんぞ」
警官がテープの前に立ち、野次馬に睨みを利かせている。
レインは林の奥の様子が見やすい位置を探して、人だかりの周りを歩いていた。
「――吸血鬼がどうのと聞いたんだが、なにがあったんだ？」
ふいに野次馬同士の会話が耳に入った。

「あの悪ガキ共さ。林の奥でなにかに襲われたそうだ。どうせ、獣かなにかだろうけど」
「野犬にでも襲われたのかねぇ？　それとも、熊かな？」
　すると、別の人間がその話に割り込んできた。
「いや、どうも獣じゃないらしいぞ。警官の話を耳にしたんだが、全身の血のほとんどを吸われていたそうだ」
「血を！？」
「馬鹿、声が大きいよ……！」
「ごめん……」
「おい、血ってまさか……」
「そのまさからしい。首に二つの穴があったそうだ」
「じゃあ、吸血鬼なのか……？」
「そうかもしれん……」
　吸血鬼という単語が話に出ると、聞き耳を立てていたレインの目つきが急に鋭さを増す。
（どうやら、情報に間違いはないわね……）
　野次馬の会話を聞きながら、レインは確認するように頷いた。
（遺体と呼ぶべき……？　それとも、まだ被害者の状態？　まあ、どっちでもいいけど、襲われたという悪ガキ共？　……の姿は見当たらないし、救急車が駆けつけてくる気配もなし。救助している様子もない。まあ、当然ね。被害者が出て、始めて私たちが派遣されるのだもの。すでに数時間以上は経っているはずよね。いまはせいぜい、現場検証をしているか、現場保持のためってところね）
　周囲の様子をうかがいながら、レインは自分なりに詮索していた。
「吸血鬼なんて、てっきり、おとぎばなしの中でのことだと思っていたが……」
　レインは、野次馬の会話にそのまま耳を傾けている。
「ああ、俺もだよ。あの古城に住んでいるっていう吸血鬼が、もしかすると、本当に存在するかもしれないって思ったら、小さい頃からそう親に聞かされて植えつけられている分、余計に恐ろしいよな

あ……」
（古城……？）
確かにそう聞こえた。レインは確認するように一度だけ頷いた。
（これ以上、ここにいてもあまり意味は無さそうね）
なんら進展のない様子を察し、その場を立ち去る人の姿が見られ出した。レインもその人だかりから抜け出し、停めてあった自分の車に戻った。
車内は暖房が入っているのですぐにコートを脱ぎ、また後部座席に投げやると、早々にエンジンをかけて、またアルフレディアの町を目指して走らせる。
林道の路肩を人がまばらに歩いている。さきほどの野次馬だろう。何人かを抜き去った。町はもうすぐだろうというレインの予測は正しかった。車を走らせて、四、五分もすると林道を抜けた。林道の先には田園が広がり、その彼方に町はあった。
アルフレディアの町だ。
平坦とは言えない道を、車体を揺らしながら走り、畑を抜ける。一枚一枚が大きなアイボリー色の石畳と、赤茶色に白というツートンカラーの煉瓦によって築かれた街並みが、車中のレインを出迎える。
青空の下、ツートンカラーの煉瓦はよく映えて見えた。
レインは軽くブレーキを踏んで、速度を緩やかなものにした。
「へぇ、いい感じ」
長い歴史を経たことで色あせ、徐々に削れていったことを想像させる古い石畳の上を、車は走る。石から石に乗り移るときに車体が小さく揺れる。あぜ道と呼ぶには少々広い、ほんのついさきほど走った道に比べれば、苦にならない程度の揺れだ。どちらかといえば、その揺れが心地いい。しかし、そうまもなくして揺れは治まって、静かなものになってしまった。見れば、まだ新しいアスファルトの道路に変わっていた。しかし、少しすると、またあの小さな揺れが戻ってきた。見ると、アスファルトの道路ではなく、またも石畳。

どうやら、この町は古い時代を捨てて、現代へと移り変わろうというその途中のようだ。
「なんだか、悲しいなあ……」
歴史のある景色が、新しいものに変わりゆこうとしている様に、レインは不満を漏らすようにポツリと呟いた。景色を楽しむため、車をゆっくり走らせていたレインは、どこかガッカリしたように、また、速度を早めてしまった。
「――あ」
そんな矢先、レインはあるものに目を止めた。
「ちょうどいいわ」
レインは車を停めた。車を下り、コートを羽織って、目の前の道を渡った。停めた車のちょうど反対側にあるそれは、見た目にもさびれた書店だった。
入口の扉を開けて潜ろうとすると、頭の上で音が鳴った。ガランガランと、かなりうるさい音だ。レインは見上げてギョッとした。扉にカウベルが取り付けられている。
扉にカウベルがついていることはある。喫茶店などでたまに見かけることがあるので、なんら不自然ではない。しかし、その大きさには思わず目を見張ってしまった。扉にぶら下がっているそれは、なんと、レインの頭ほどもある大きなものだったのだ。それはどう見ても、扉のベルとして作られたものではない。
すぐに察しはついた。このアルフレディアの町にはいくつか牧場があり、そこで使われなくなったものを再利用しているのだろう、きっと。それにしても、家畜用のものをそのまま取りつけるとは、豪気というか、なんというか……。
「性格が表れている感じがするわね……」
動物が口をあんぐりと開けているような形をしたそのカウベルを見上げながら、そっと扉を閉める。うるさいので、音を鳴らさぬように。
少しホコリっぽく、薄暗い感じのする店だった。外から見るとこ

ぢんまりとした印象を抱かせる店だったが、中も同様で、期待を裏切らない造りの店だった。
　天井につこうかという背の高い本棚が数えるばかり並んでいる。びっしりと本が並んでいるのだが、どれも古そうなものばかりで、数十年ほど前で時間が止まっている、そんな錯覚を覚えてしまう。きっと、この大きな本棚が圧迫感を与えているのだろうと思いつつ、レインは店の奥にある小さなカウンターに目をやった。そこに老人がいる。
　ネズミを連想させるような細く痩せた顔つきに、丸いフレームのメガネをした老人が、まるで置物のようにそこにいた。
「いらっしゃい」
　老人はちょっと顔を上げて、メガネをまたちょっとだけ下へとずらし、上目遣いになりながら言った。
　レインは真っ直ぐにカウンターを目指した。
「あの」
「はい？」
　お互い、相手の風貌を相手に気づかれぬよう、素早く見定める。
「私、旅行者なのですが、この地方の地図とか、観光名所を紹介するような本はありませんか？」
「ああ。それなら、入り口の横にあるよ」
　老人はレインが来た道の方向を指差した。細い指だ。まるで骨と皮だけ。
「ありがとうございます」
　レインは軽く微笑み、踵を返した。入り口へと戻る。
　老人の言うとおり、入り口の横に置かれてある小さな棚に、彼女が求めていた地図や、観光名所を紹介している雑誌などがあった。店内の様子が気になって気づかなかった。
　街のガイドブックがあったので、レインはまず、それを手に取った。
「予約したホテルは……ああ、ここね」

ホテルの名前と場所が地図には記されてあった。この書店からそう遠くない。
「ああ、古城はこれのことね」
レインはページをめくり、あるところで手を止めた。
吸血鬼伝説――
古城のことは、そのような題名でガイドブックにも掲載されてあった。
ガイドブックによれば、古城は町の外にあり、方角は西。古城まではそう遠くはなく、道のりは、街に来るまでに通ってきた林道を少しばかり引き返し、その途中にある脇道を抜ける。脇道は一本道で、その先の草原に通じていて、その先に古城は建っているらしい。徒歩で数十分ほどの距離にあると書かれてあった。
ガイドブックには古城の写真も載っている。古城と言うだけあって古そうだが、写真を見る限りは立派に見える。
ガイドブックによれば、古城は私有地らしく、外から見る分には問題ないが、内部には入れないとのこと。かなり古いらしく、天井や床が脆く、崩れたり抜けたりする可能性があって危険なのだそうだ。
ガイドブックの紹介が正しければ、中世の時代から存在するという。
（本当かしら……？）
レインは怪訝そうな顔で記事を眺めた。
「これ、おいくらですか？」
雑誌を戻し、代わりに携帯出来る小さなガイドブックを手に取ると、後ろを振り返り、老人に問いかけた。
「ああ、それなら構わんよ。お嬢さんは美人だから、サービスだ。持っておいき」
老人はにこやかに微笑んでみせた。メガネの奥の細い目をさらに細める。一見、愛想の悪い老人に思えていたレインは、そんな老人の笑顔に少々戸惑った。

「はるばる、この街に来てくれたお礼だよ」
「あっ、ありがとう」
レインも感謝の気持ちを表わすように、ふっと笑みを浮かべる。けれど、どこかぎこちない。何故なら、彼女のは作り笑顔だからだ。
「頂いていきます」
レインは譲り受けたガイドブックを手に、小さくお辞儀をした。
「ああ。よかったらまたおいで」
老人は屈託のない笑顔を浮かべて、手を振り、店を出てゆくレインを見送った。その際、例のカウベルのことを忘れていたらしく、レインは音の大きさにまた驚いた。
ガランガランというるさい音を立てながら、扉は閉まった。
「……やっぱり、あれはうるさいかのう？」
老人はゆっくりと手を戻しながら、鼻で小さく溜め息をついた。外に出て、扉を閉め、老人に背を向ける形になると、途端にレインの顔から表情が失われた。おもむろに自分の口元に触れる。
「やっぱり、不自然よね……」
車が来ないことを確認しながら道路を渡るレイン。悩ましげな顔をしている。扉をくぐろうとしたとき、扉のガラスに自分の顔が映ったのだが、その表情がなんとも固かった。一目見るだけで作り笑顔だと分かってしまうような、そんな表情だったのだ。さきほど、カウベルの音に驚いたレインだが、なにより驚いたのは自分の表情だった。
レインは作り笑顔が苦手だった。
「練習しているのになぁ……」
レインは不満そうに呟いた。
「とりあえず、ホテルに行こう」
車に乗り込み、エンジンをかけながら、レインは呟いた。手にしていたガイドブックを助手席に投げやると、ハンドルを片手で握る。もう一方の手はまだ口元をいじっていた。慣れない作り笑顔をしたせいで、口や頬の筋肉に違和感があった。

思い出したように車を走らせる。さきほど見た地図によれば、ホテルは逆方向にある。車をUターンさせるレイン。その際、さきほどの老人の姿が、扉のガラスを通して見えたので、軽く手を振っておいた。老人が見えているのかどうかは定かではないが。

ホテルはそうまもなくのところにあった。

周りの建物と同じで、ホテルの外壁も赤と白のツートンカラー。デザインも似ており、一見するとホテルとは識別出来ず、周りに立ち並んでいるアパートと見間違えてしまう。看板がなければ通り過ぎていたかもしれない。

「この街だと、そう期待も出来ないわよね」

手配されているはずのホテルの外観を車中から眺め、レインは呟いた。

レインは車を、ホテルの裏の駐車場に停めた。駐車場とは名ばかりの空き地だが。

助手席に置いてあった、着替えなどの必要な荷物が入っている革製のアタッシュケースだけを抱えて、レインはホテルの正面玄関に引き返した。

「いらっしゃい。食事かい？」

扉をくぐると、すぐに声をかけられた。入り口のすぐそばにカウンターがあり、そこに一人の男性がいる。ホテルの主人だろう。まだ若いが、落ち着いた感じが見受けられる。その割に身なりはだらしなく、頭に寝ぐせもある。三日四日程度伸びた無精ひげもあって、オッサン臭い印象があった。

身なりさえ正せば男前だろうに――

レインは素早く男性の風貌を見定めた。

「いえ。部屋を予約していたものですが」

扉を閉めながら、レインは答えた。

「名前は？　……ああ、レインさんかい？　レイン＝コルネットさん」

ホテルの主人と思われる男性は、手元にある台帳をチラリと覗い

た。
「え？　ええ」
名前を言い当てられ、レインは少し驚いた。しかし、すぐにハッとした。もしかしたら、自分以外に予約している客などいないのではないだろうかと。
「こんな田舎の町に観光かい？　それとも、例の騒ぎで？」
「観光です。……例の騒ぎというのは、林の人だかりのことですか？」
「ああ、見たかい？　そうさ、この街の悪ガキ共が、古城に住む吸血鬼に襲われたんだよ」
「吸血鬼……ですか？」
「なんてね。迷信だよ、迷信。吸血鬼なんかいやしないよ。どうせ、野犬かなにかにでも襲われたのさ。ハロウィンだからって、羽目を外し過ぎなんだよなあ」
「野犬ですか……」
「ああ、大丈夫、大丈夫。街の中には入ってこないから」
「はあ」
「おっと、怖がらせちまったかなあ」
主人は罰の悪そうな顔を浮かべつつ、後ろを振り返り、壁かけの棚から鍵を一つ取る。
「部屋は一番上だ。見晴らしのいい部屋だよ。そこのエレベーターから行ってくれ」
主人は右手を指差した。
「分かりました」
「なんにもない町だけどさ、まあ、楽しんでいってくれ」
「空気はきれいですよ」
「ハハッ、料理も美味いよ。食堂もやってるから、よかったら後で確かめてみてくれ」
主人はもう一度右手を指差した。
「期待します」

主人から鍵を受け取り、食堂へと続く廊下を横目に、足早にエレベーターに乗り込んだ。
最上階。部屋はエレベーターを降りてすぐのところにあった。というよりも、その階に部屋はその一つだけしかない。
「う、寒い……」
鍵を開けて、扉を開けて、室内へと立ち入ったレインを、ひんやりとした冷たい空気が出迎えた。身を震わせるレイン。建物の中だからと脱いであったコートを素早く羽織った。
部屋は手前と奥の二つに分かれていた。ベッドも二つある。テレビもある。暖炉があり、そのかたわらには電気ストーブも用意されてあった。準備はいい。設備も悪くない。だが、いまはどれ一つとしてついていなかった。どおりで冷えるわけだ。
想像していたよりも広く、清潔感のある部屋だった。多分、このホテルにとってここはスイートなのだろう。とはいえ、有名な観光地にあるリゾートホテルからすれば多少広いツインといったところだが。
レインはアタッシュケースを手前の部屋のベッドの上に置くと、その足で窓に向かった。カーテンが閉め切られていて、明かりをつけても薄暗く、なによりもまずカーテンを開けたかったのだ。その上、空気も重たいが感じがしたので、窓も開け放った。押して開ける両開きの窓だ。
冷たい風が頬を打つ。まだコートを着ているので、震え上がるほどの寒さではない。
「へぇ」
そこから見える景色に、レインは少し感心した。
アルフレディアの街の建物はたいていが二階から三階ほどの高さしかないのだが、このホテルはそれよりも二階ばかり高く、最上階であるこの部屋から見える景色は、街が一望出来るものだった。時代を感じさせる赤と白の街並みに、青々と茂った針葉樹林。その向こうには黄金色に染まった草原が見える。彼方には頂が白く染まっ

た山々も見えた。
「！」
針葉樹林の向こうの草原に、それは見えた。
「あれが、古城ね」
灰色をした人工的な建造物に、赤い屋根の頂が見えている。
「そう、あそこに吸血鬼――ヴァンパイアが……」
古城をじっと見入っていたと思えば、急に踵を返し、窓から離れてしまった。さきほど、ベッドの上に置いたアタッシュケースに歩み寄る。鍵を外し、アタッシュケースを開けた。中には、丁寧かつ、整頓されて収納されている着替えや化粧道具などの小物が入っていた。レインはそれらを横にやると、アタッシュケースの底に手をかけた。底に小さな穴がある。指を入れて持ち上げると簡単に底板が外れた。その下にも収納スペースがあった。そこにあったのは、銀色に輝く二丁の拳銃と、銀の鞘に納められた小型剣が二振り。
自動式拳銃――オートマチックピストルと呼ばれるタイプの拳銃である。別にアタッシュケースに入れられてある、弾丸を収めるための弾倉を取り、レインは残弾数を確かめた。弾倉には銀色に輝く弾丸が１５発、ジグザグになって収められている。
弾倉を本体の、構える際に握るグリップ部分の下から挿入して、本体上部のスライドを引いて撃鉄を起こし、初弾を装填した。
レインは銃を左手に持ち直し、構えた。まずは正面を狙うように銃口を向け、続いて、それを横に移動させる。銃口を窓に向けた。林の向こうにわずかに見える古城を狙う。
「もうすぐ、陽が暮れる……」
青空が赤らみ出している。まもなく陽が暮れるのだろう。
「夜を待ちなさい。暗く、狭い棺桶の中でね。――私が、滅ぼしてあげるから」
小さな古城を見つめ、レインは独り言のように呟いた。
横目にふと鏡が見えた。鏡にはレインの姿が映し出されている。その目は、血のように赤く輝いていた。いつもならば灰色の瞳なの

に。

夕陽が、鏡を通して反射し、レインの瞳を赤く染め上げていた。

レインはふと思った。こうしてみると、なんだか、自分自身が吸血鬼になったような、そんな気がすると――

レインは鏡に映る自分に銃口を向けると、ぐっと引き金を引いた。

……しかし、なにも起こらない。本来であれば撃鉄が下り、弾丸が一発の轟音と共に発射されるはず。しかし、かけられていた安全装置が働いて、引き金が引かれず、撃鉄が下りることもなかった。

カチリ、という虚しい音だけが、部屋にうるさく響いた。

（2）

街の明かりが数えるばかりになった頃、レインは動いた。
片方のベッドの上に開いた状態で置いてあったアタッシュケースから装備を取り上げ、身につけているショルダーバックやホルスターに収容してゆく。
レインはすでに着替えを済ませていた。身体のラインがハッキリと見える、一見すると全身タイツにも見えるそれは、動きやすさを重視しつつも、頑丈で、ゴムのような柔軟な素材で造られた戦闘用スーツである。その上に、万が一にでも咬まれぬようにと考慮して、首まわり・両肩・胴体・腰まわり・肘から手・膝から足までを守護する、特殊素材のプロテクターを身につけている。色は、光が反射しにくく加工された銀。
その上に専用のホルスターやショルダーバックなどを装着し、拳銃や小型剣などの各種装備を携帯する。レインは小型剣をショルダーバックに、拳銃をホルスターに収容した。他にも、切れ味の鋭いワイヤーカッターや、心臓に直接打ち込むための杭と、ハンマーを携帯している。それらの装備には必ず、“蛇に突き立てられた十字架”という特殊なデザインが施されてあり、いずれも表面に銀のコーティングが施されてあったり、銀を大量に混ぜた特殊合金製で出来ている。
すべての準備を終えると、レインは最後、きれいに折り畳まれてあった赤い布を丁重に取り上げた。持ち上げると、それはひとりでに広がり、一枚のマントとなった。
真紅のマントだ。血のように鮮やかな色をしている。各種装備と同じシンボルマークが大きく描かれてある。
表は赤だが、裏は黒というそのマントを、レインは大きく翻しながら羽織った。首元を守るためのプロテクターについている金具に取りつけた途端、レインの目は鋭さを帯びた。怖いくらいの真剣な

表情になる。
アタッシュケースをそのままに、出口に向かうレイン。途中で足を留めて、鏡を覗き、自分の姿を確認して一度だけ小さく頷き、足早に部屋を出ていった。
誰にも気づかれぬように、そっとホテルを抜け出す。
明かりの乏しい深夜のアルフレディアの街を、レインは影の中を選び、風のように走り抜ける。誰にも姿を見られぬよう、可能な限り人目を避け、素早く街を出た。
西を目指してあぜ道を抜け、林を突っ切る。しばらくすると草原に出た。
木陰に身を潜めながら、レインは夜空を見上げた。
今宵は満月――
夜空には煌々と丸い月が光り輝いている。今日のこの日が満月の夜とは、いやな偶然だ。レインは少しうっとうしそうな顔をした。
満月が大きな眼のように思えて仕方がない。自分の姿を見られている気がして、どうも落ち着かない。レインは満月から逃げるように、身を隠す木陰の立ち位置を変えた。
視線を空から周囲に散らす。レインは木陰から、その姿を確認した。
古城――
まだ距離はあるが、それでも大きい。写真で見たとおり、立派な城だった。灰色をした煉瓦で外壁が組まれている。それが月光を浴びると、薄暗い青色に染まって見えた。
相当古いものなのだろう。近寄ると、ひどく荒んでいるのが見て取れた。一部の外壁は崩れており、なにかしらの植物の蔓も伸び放題。雑草も生え放題で、ろくに手入れされていないようだ。いまが夜だからなのか、レインにはひどく不気味に見えた。
怖気づいたわけではない――
レインは自分にそう言い聞かせて、存在しない誰かに言い訳をし、自分の弱気を、自ら奮い立たせた。

レインは走り出した。月下の草原を駆け抜ける。
古城に触れられるほどの距離まで来ると、レインはすぐさま外壁に背中を押しつけた。周囲の様子をうかがいつつ、マントの内側に手を忍ばせて、銃と小型剣をその手に取る。右手に小型剣を握り、左手で拳銃を構える。
背中を外壁に軽く押し当てたまま、レインはそっと移動を開始した。少し遠くに見える、古城の正門を目指した。しかし、ちょっと立ち止まっただけですぐに通り過ぎてしまう。見上げるほど大きな二枚扉の正門だが、厳重に鍵がかけられている上、例えその鍵を開けられたとしても、彼女一人で開けられるとは思えず、レインは一目見ただけで諦め、そのまま壁伝いに移動し、別のルートを模索する。
すぐに裏口を見つけた。外壁と同じ煉瓦石で作られた、小さくて短いトンネルのような入り口だ。扉があるのだが、壊れており、倒れてしまっていた。朽ちて倒れたのではなく、こじ開けられて捨てられたように見える。それも、ごく最近に。
レインはトンネルを潜り抜けた。一度闇に支配されて、再び、月明かりの下に出た。
トンネルは中庭へと通じていた。
広い中庭だ。中央には彫刻が施された噴水があって、両端には花壇も設けられている。しかし、いずれも、長きに渡り、人の手が加えられていない。噴水の水は枯れて、花壇は雑草ばかりが生え揃い、石像は倒れて壊れてしまっている。レインはそれらを横目にうかがいながら、道として地面に敷かれた石畳の上を突き進み、素早く中庭を突っ切った。
「……？」
道中、壁に焼け焦げたような妙な跡があったのが少し気になったが、いまはとりあえず無視することにした。
中庭の奥に扉が一つ。正門に比べればずっと小さな二枚扉だ。やはり、こちらも厳重に鍵が掛けられてあった。二つの取っ手に鎖が

巻かれ、南京錠がかけられてある。しかし、
これなら開けられる――
レインはショルダーバックからピッキング用の道具を取り出し、扉の前で膝を曲げた。
鍵はすぐに外れた。鎖と南京錠が、音を立てて彼女の足元に落ちた。
一度は収容した拳銃と小型剣を再び手にすると、レインは小型剣をそっと突き出して、その切っ先で扉を押し開けた。切れ味の鋭い切っ先は、そっと押し当てただけで扉にわずかだが食い込んだ。
開かれた扉の向こうは暗闇が支配する世界。月明かりが扉側から中を照らすも、すぐに闇に飲み込まれてしまった。
小型剣の切っ先を闇に向けて、そっと中に入れる。……なんら反応はない。
小型剣の丹念に磨かれた刀身を鏡代わりに、闇の中を覗く。見える範囲に、人影などの怪しいものは見られなかった。
レインは素早く小型剣を引き戻した。小型剣を逆さに持ち直すと、道具の中からルミカライトと呼ばれる、小さな筒状のものを取り出した。透明な丸い棒状の容器の中に色鮮やかな液体が入ったものだ。
それは折ると発光する。それを一つ、また一つと折って、闇の中へと投げ入れた。
闇が、ぼんやりとした蛍光に照らされる。
「怪しいところはない、わね……！」
武器を構え、周囲に目を配りながら、レインは一歩を踏み出した。
闇に我が身を投じるのは、あまり心地いいものではない。
完全に身体が入り切ると、レインはそっと右手で扉を閉めた。
一度、完全なる闇が襲ってきた。まもなくして、再び、ぼんやりとした明かりが辺りを照らし始める。
レインは辺りを見渡した。どうやら、ここは廊下らしい。左右に道が伸びている。窓がない。だから、こんなにも薄暗いのだろう。
レインは辺りを念入りに見回すと、一度、息を整えた。

「……よし！」
拳銃を持つ左手を前に伸ばし、逆手に持った小型剣を胸の前に添えるように構える。
足音を立てぬよう、忍び足で、それでいて駆け足で、左右に続いている廊下の先を確認するべく、正面の壁を目指して突き進んだ。

カチッ！

「！？」
足元で音がした。ハッとして、レインは自分の足を見た。彼女の目に映っているのは、漆黒の闇に浮かんだ、自分の二本の足だけ。
（床がない！？）
落とし穴。
そう気づいたときには、もはや遅かった。レインの足は、床を失ったことでバランスを崩し、吸い込まれるかのように漆黒の穴へ。
「くあっ！」
レインは咄嗟に両手両足を一杯に伸ばし、穴の縁に、拳銃のグリップと、小型剣の柄と、両のつま先を突き立てて、自分の身体をなんとか支え上げた。
「ぐぐぐ……！」
辛うじて落下を免れたレイン。それは見事なまでの反応だった。
……しかし、
「こっ、ここから、どうしよう……！？」
手足を一杯に伸ばした状態のレインと、穴の縁から縁までの長さはちょうど同じぐらいだった。あまりにピッタリ過ぎて、止まっているのが奇跡なほどだ。ここから次に転じることは容易ではない。
レインは動けなくなってしまった。
「な、なんとか、少しずつ、横に……！」
じり、じりと、レインは身体を小刻みに揺らしながら、真横に移動を始めた。

一度に動ける距離は数ミリ単位。いつまで、この状態を保てるやら……。
普段は使わない筋肉が悲鳴を上げている。腕が、足が、お腹が、全身が震えたくもないのに震えてしまう。落ちるのももはや時間の問題かもしれない。レインの脳裏に、諦めの文字が思い浮かび始めていたそのときだった。

パカンッ！

頭上で音がした。また、ハッとして、素早く、首だけでなんとか後ろを振り返るような形で見上げると、天井に穴が開き、なにか黒い塊が落下するのが見えた。それが近づいてきたとき、やっとその正体が分かった。それは、レインの頭よりも大きな鉄球だった。
鉄球がレインの腰に直撃した。
「ぐえっ！」
身体が弓なりに反る。わずかに引っ掛かっていただけの手足は見事に外れて、レインの身体は、鉄球に押されるように漆黒の穴へと飲み込まれた。
「そっ、そんなぁあああああっ！？」
一瞬にして、目の前が真っ暗になった。

真の闇とはこのことかと、そう思い知らされるような場所にレインはいた。自分自身の姿すらも見えないような、そんなところ。
「うぅ……」
全身に痛みが走る。レインは消え入るような声を漏らした。
高いところから落下しただろうことは、頭の片隅に覚えていた。痛みはそれが原因だ。もしかしたら、鉄球が身体に当たったからなのかもしれない。レインはぼんやりとした、意識を失いかけている頭でそう考えていた。目も霞み始めていた。しかし、それすらも、この闇の中では分からなかった。

ハァ……。

吐息が聞こえた……！？

間違いはない。人の気配がする。誰かがいる。自分ではない誰かが、この闇の中にいる。そう感じた瞬間、レインの心臓が激しく脈を打ち始めた。

「ヴァン、パイア……！」

レインは薄れる意識の中、辺りをまさぐった。冷たい石の感触が手に伝わる。彼女は、落ちた拍子に手放してしまった拳銃や小型剣を探していた。だが、悲しいかな、手が届く範囲には存在しないようだ。

ハァ……、ハァ……。

吐息が大きく聞こえ始めた。気配が近づいてくるのを全身で感じる。

レインの心を恐怖が支配する。彼女は気が狂ったように、ところ構わず手を伸ばして、失った武器を探した。そのとき、手になにかが当った。

「！」

レインは藁にもすがる思いでそれを掴んだ。……しかし、それは覚えのある感触ではなかった。一度触れて、確かめるように何度も触れて、レインはその正体を知る。

それは、革靴の、堅いつま先の部分に思えた。

誰かがいる――

見えない向こうに、ヴァンパイアがいる。とてつもない恐怖がレインの精神を襲った。その瞬間、張り詰めていた糸がぷつりと切れてしまったかのように、彼女の意識が急激に遠ざかってしまう。

「また、侵入者ですか……」

失われる意識の中で、声が聞こえた。
「おや、これは……なっ、これは！？　まさか、彼女は……！？」
声の主はなにかに対してひどく驚いている。
（男の声……ヴァンパイア……？）
「まさか、この少女は、ヴァンパイア・ハンター！……――」
レインの意識は、その声を最後に途切れてしまった。

（3）

ぼんやりとして輪郭の定まらない景色を、レインは無意識のままに眺めていた。

三枚羽根の大きなものが回っている。シーリングファンと呼ばれる、天井扇のことだ。照明と一体化しているそれが、くるくると回っている。

（ああ、そうか……天井だ。私は、天井を見ているんだ……）

シーリングファンの緩やかに回転する様を眺めながら、レインはふと思った。

その瞬間、ふいに視界が鮮明なものとなる。

「……！」

目を見張り、驚いた顔をして天井を見つめるレイン。そのとき、光が目にチラついた。反射的に顔を向ける。

カーテンが揺らいでいるのが見える。鮮やかな赤い色をしたカーテンだ。その隙間から日光が差し込んでいる。それがレインの目に当たっていた。

両手がしなやかな感触のものに触れている。布地のようだ。目の端に見えているのは、向こうに見えているカーテンよりも、少し暗い色をした赤いもの。シーツかもしれない。そうだとすれば、自分がいま横たわっているのはベッドだろうか……？

シーツと思われる赤いものを手で探りながら、レインは思考を巡らせていた。

「私は……一体……！？」

そう独り言を呟くレイン。徐々にだが意識が鮮明なものとなって、途切れていた記憶が甦ってきた。

「……そうだ、罠に！」

ハッとして、レインは動いた。軽く反動をつけるように、横たわっている上半身を起こそうとする。しかし、すぐにまた横になって

しまう。
「うぐっ！？」
全身を電流が駆け巡ったような、そんな感覚だった。痛い。特に、背中と脇腹が痛む。その痛みが彼女の頭をより鮮明にする。
レインはまたハッとした。
「……まさか」
レインの表情に凄まじい動揺が見て取れる。瞳が激しく左右に泳ぐ。全身が震え上がる。レインはいまにも卒倒しそうな表情を浮かべて、そっと、自分の首筋を手でまさぐった。左、そして、右――
「咬まれて、ない……？」
交互に首筋を探る。手は自分の肌と髪以外のなにかしらの異物に触れることはなかった。具体的に言えば傷だ。吸血鬼に咬まれたと思われるような傷跡は一切見つからなかった。
「……」
自分の首を締め上げるようなポーズを取ったまま、レインはしばらく固まっていた。
「ハァ……ッ！」
大きな溜め息と共に、レインは脱力した。手を首から離し、シーツに沈めた。
「よかった、うん、よかった……でも……でも、どうして……？」
安堵するレイン。しかし、咬まれていないということが、彼女には理解出来なかった。
何故、助かった……？
「くっ」
レインはまた身体を起こそうとする。次は、まずは身体を仰向けからうつ伏せにして、腕と足を使うようにして身体を起こした。彼女は這うような形で、とにかく身体を座する体勢へと持っていった。
「ハァ……」
ベッドの上に座るような体勢になると、レインは疲れたように一度だけ溜め息をついた。息を整えた後、視線を遠くへ向ける。よう

やく、自分がいる場所の様子が見渡せた。
どこかの部屋であることは間違いない。しかし、そこはレインが知る場所ではなかった。
広い部屋だ。縦に長い。とても奥行きがあり、部屋の端が遠く感じる。
少し薄暗い。理由は、すべての窓のすべてのカーテンが、わずかな隙間がある程度しか開いておらず、明かりも灯されていないからだ。とはいえ、視界を遮るほどではなくて、部屋の様子は充分に知れる。
部屋には人が生活するには必要になるだろう家具が一式揃えられており、生活感に満ち溢れていた。
「趣味は悪くないわね……ちょっと、赤が多いかしら……」
部屋全体を一望すると、レインは何気なく呟いた。
天井には照明のついたシーリングファンが等間隔に設置されている。床には淡いワインレッドの絨毯が敷き詰められてあった。それは一目で毛の長い上等なものだと分かる代物。足を置けば、きっと、心地よい感触が足を包み込むだろう。
レインから見て、右手には開放が可能な四角い大きな窓が等間隔に並んでおり、真紅のカーテンと純白のレースが風に揺れていた。窓と窓の間の壁には、額に入れられた絵画が飾られてある。左手の壁には家具が並んでいた。
部屋に置かれている家具類だが、レインがいま座っているベッドを始めとし、手近にはアンティークな丸いテーブルと椅子が一式。その向こうには三人がけの白いソファーと、大理石のテーブルが置かれている。ソファーにはなにやら、ジュラルミンケースのようなものが置かれてあった。ソファーの正面にはＡＶボードがあって、大きなテレビが一台。その奥にはシステムキッチンが見える。アンティークな食器棚も見えた。
どうもここは、寝室・リビング・キッチンを一つに繋げたような、そんなところだった。

広い上に、豪華な造りに高級感のある家具が揃えられたこの部屋を、レインは感心するように眺めていた。そんなとき、ふいに気づいた。

「！？」

窓際に人影がある。窓と窓の間の壁に身を寄りかからせて、腕を組み、じっとレインのことを見ていた。それにふいに気づいたレインは、びくりと震えてしまった。一瞬にして心臓が激しく脈を打ち始める。

青みを帯びた黒髪に、血のような赤い瞳をした、痩せ型の、肌が異様に青白い男。

薄暗い部屋の中においても、その男だけは異様に存在感があった。

（いつの間に！？　気づかなかった……）

見ると、その男の近くのカーテンが揺れている。窓が開いているようだ。男はそこから現れたのだろうか？　それとも、実はずっとそこに立っていた……？

「ヴァンパイア……！」

レインはそっと自分の身体をまさぐり、なにかを探した。しかし、悲しいかな、武器になりそうなものは、なに一つとして身につけてはいなかった。全身タイツのような服に、各所を守るプロテクターだけを身にまとっており、ショルダーバックもホルスターもない。銃はなく、小型剣もない。なにもない……。

レインはまた激しく動揺する。

「……」

そんな彼女の動きを察したように、男は動いた。寄りかかっていた壁から離れて、まずソファーに立ち寄り、そこに置かれてあったジュラルミンケースを手に取った。その後、男は真っ直ぐにレインの元を目指した。

近づいてくる男を警戒して、レインは軽く腰を浮かして身構えた。男は、彼女の動きを見ていながら、足を止めようとはせず、自ら彼女の前へと歩を進めた。抱えていたジュラルミンケースを、ベッド

の近くにある丸テーブルの上に置いた。
近づいてきたことで、男の装いが知れた。男は黒のジャケットに、紺色のシャツというカジュアルな装いをしている。
睨み合う形になる中、男はすぐに視線を逸らし、ジャケットの胸ポケットに手を入れた。
「！」
レインは反射的にその身を強張らせる。だが、男は気にも留めず、胸ポケットに入っているものを取り出し、両手に装着した。
男は白い革製の手袋をした両手を揉み合わせた。
男は無言のままにジュラルミンケースを開けて、ケースの向きを変え、中身をレインに見せた。ジュラルミンケースの中には、レインの装備が一式、きれいに収納されてあった。
「……！」
それは、私の！　……と言いかけて、レインはぐっと言葉を飲み込んだ。
男はケースから拳銃を取り上げた。銀の拳銃だ。拳銃を手でもてあそぶように確かめ、チラリと、睨むようにレインを見た。
「……」
互いに無言。微動だにしない。両者の間には異様に張りつめた空気が満ちていた。天敵同士が相見えたとでもいったところか。
先に動いたのは男だった。なにを思ったのか、男は手にしていた拳銃をケースに戻し、蓋を開けた状態のまま抱え上げると、レインの目の前に置き、後ろに下がってしまった。
「……！？」
男の行動の意味が分からない。まさか、返すとでも言うのだろうか？　レインは思わず戸惑ってしまった。一瞬、呆然としてしまったレインだが、すぐさま我に帰り、手を伸ばせば届くケースの中から拳銃を取り上げて、素早くスライドを引いて撃鉄を起こし、男に向けて構えた。
「弾丸はすべて抜いてありますよ」

男が初めて喋った。
「！？」
その言葉にレインはハッとし、構えていた銃を戻して、弾倉を取り出し、残弾数を確かめた。男の言うとおり、弾倉には一発たりとも入ってはいない。空だ。見れば、入れられてあったはずの弾丸はすべてケースの中だった。それも、きれいに揃えて仕舞われてある。几帳面なほどに。
「くそっ！」
レインは拳銃を捨て、代わりに小型剣を掴んだ。鞘から引き抜き、切っ先を男に向ける。
「フー……」
いまにも飛びかからんとするレインの鬼気迫る目と姿に、男は小さな溜め息を漏らした。すると、男は彼女に背を向けて、最寄りの窓へと歩み寄った。カーテンを掴んで、さっと開け放った。まばゆいばかりの光が部屋を照らす。
「うっ！？」
目が眩み、レインは咄嗟に手で顔を隠した。目が光に慣れてくれるまで、その手をどけられない。すぐではなかった。
光に照らされたことで、一見、死体と見間違えてしまうような異様なまでに青白い肌が露呈する。瞳はやはり、血のように鮮やかな赤い色。髪は青みを帯びた黒と思っていたが、本当は深く濃いダークブルー。
男は非常に美しい顔立ちをしていた。切れ長の眼に、整った鼻筋。シャープな形をした顎。それに、異様なまでの青白い肌と薄紫色をした唇に、髪や瞳の色も相まって、妖艶なまでの存在感を有している。それゆえ、人間の気配というものがまるで感じられなかった。
目の前にいるのは人間ではない――
男の姿を目の当たりにしたレインは、そう確信した。
「あなた、ヴァンパイアね……？」
小型剣の切っ先を向けたまま、レインは問い詰めるような物言い

をする。だが、すぐに彼女はハッとして、あることに気づいた。いまの自分の発言に、彼女は自ら疑問を抱いてしまったのだ。何故なら、目の前にいる男は、自分の判断が正しければ、まず間違いなくヴァンパイアだ。けれども、そのとき、男は太陽の光の中にいた。太陽の光を、全身に、一杯に浴びていたのだ。

ヴァンパイアは太陽の光を浴びれば灰になる――

レインの脳裏で、ヴァンパイアに関する知識がうるさく囁いた。

「あなた、何者なの……！？　ヴァンパイアでは、ないの……！？」

レインは戸惑っていた。それは、彼女がいま握り締めている小型剣に大きく表れている。突きつけるように構えた切っ先が小刻みに震えて、ゆっくりとだが、下を向き始めている。彼女が自信を失いつつあるのと、動揺しているのがハッキリと見て取れた。

男はその様子を、しっかり目に捉えていた。レインの変化を見逃さなかった。とはいえ、その原因まではさすがに分からないが。

「お嬢さん、あなたはヴァンパイア・ハンターですね？」

男は問いかけた。

その言葉に、ハッとするレイン。すると、彼女の顔から戸惑いが失せた。下を向こうとしていた切っ先も、再び、真っ直ぐに力強く、男に向けられる。

「やっぱり、ヴァンパイアなのね……！？」

男は自分の正体を知っている。自分の正体を知っているものは、すなわちヴァンパイア。レインは今一度、大きな確信を抱いた。

「……」

再び、睨み合いとなる。しかし、睨んでいるのはレインだけだった。彼女が、一方的に男を睨んでいる。当の男は、無表情にも近い顔でレインのことを見ていた。

睨み合いが続く。

「くっ」

なにも答えない男の態度と、何故、太陽の光を浴びても灰にならないのかという激しい疑問に悩み、戸惑い、レインは目に見えて苛

立っていた。
「こっ、答えなさい！　あなたは一体、何者――」
根負けしたように、レインが言葉を荒げたそのときだった。
グゥゥゥ～、キュルルルゥ～……。
音がした。なんとも情けないような音が、部屋に響いた。
「……？」
その妙な音に気づき、男は思わずキョトンとしてしまった。いまの音はなんだろうかと、部屋を見回すも、男はすぐに気づく。その音の出処を。何故ならば、レインの顔が真っ赤だったからだ。
「あ、ああ……！」
男はなにかを察し、納得したような仕草をした。
レインは顔を耳まで真っ赤にし、目を激しく泳がせている。
「ぷふっ」
そんなレインの姿に、男は思わず吹き出してしまった。素早く手で口元を押さえるも、わずかな笑い声が漏れてしまった。
「～～！？」
小型剣の切っ先が大きく上下に揺れている。突き出している腕が小刻みに震えている。激しく動揺しているのが見て取れる。必死に隠そう、誤魔化そうとするその姿がなんとも可愛らしく見え、男は堪え切れないとばかりに目を細め、肩を揺らした。声には出さんとしているも、笑っているのは明らかだった。
それがまた、レインの恥ずかしさを助長させた。
「ふふっ。あ、失敬……うん、もうお昼ですからね。お腹が空くのも無理はありませんよ、ふふふっ。……うん、失敬。――そうだ、ちょうど昼時なんです、ランチでもお作りしましょう。そうです、そうしましょう」
そう言うと、男は踵を返し、背を向けて歩き出した。そうかと思えば、また口元に手をやり、また目を細めた。

「なっ！？　ちょ、まっ、待ちなさい！」
レインが止めるまもなく、男は彼女に背を向けたまま、スタスタと歩いていってしまう。男が向かったのは、同じ部屋にあるシステムキッチン。冷蔵庫を開けて中身を覗いている。顎に手をやり、なにやら考えている。
男との距離がある程度開くと、レインは慌てて小型剣を横へ置き、ケースの中から再び拳銃を取り出した。素早く弾倉を取り出して、ケース内に仕舞われてあった弾丸を乱暴に掴み取り、素早く収容した。弾丸で満たされた弾倉を装填するや否や、スライドを引いて撃鉄を起こし、横に置いてあった小型剣を引ったくり、ベッドから飛び降りた。
レインは急ぐあまり、身体が負傷していることを忘れていた。一瞬だが宙を舞い、足が地面に降りたその瞬間、鈍い痛みが全身を駆け巡った。毛が長くて、しなやかで、重さを吸収してくれる上等な絨毯とはいえ、痛みを和らげてはくれなかった。
「つう〜〜……」
痛みに耐え、重い足取りながら歩き出すレイン。すぐに駆け出す。
その頃、男はカウンターにもなっているキッチンに置いてあった椅子の背もたれにかけてあったエプロンを取り、素早く身につけていた。ジャケット、それに手袋はあらかじめ取ってあった。男は脱いだジャケットを、エプロンの代わりに椅子の背もたれにかけた。
男はシャツの袖を捲りながら、キッチンに立った。すでにいくつかの材料が揃えられており、男はその中の一つに手を伸ばそうとした。すると、そこへレインが駆けつけた。
レインはカウンター越しに銃口を突きつけた。
「あなた、なにを考えているの！？」
鋭い目つきで男を睨みつける。
「考えていること、ですか……？　うーん、そうですね、いまはとりあえず、なにを作ろうかと考えているところでしょうかね？」
男は苦笑いを浮かべながら、木で出来た大きな深皿に入れられた

野菜を指差した。
「今日は良いナスとトマトがありますから、これでペペロンチーノでも作りましょうか」
男は色鮮やかなナスとトマトを両手に取り、にこっと笑顔を浮かべた。
「はあ……？」
おかしな顔をして、おかしな返事をするレイン。混乱しているようだ。
銃をカウンター越しとはいえ突きつけられていながら、男はなんら慌てる様子も無く、平然とし、棚から寸胴鍋を取り出したかと思えば、水を七、八分までそそぎ、火にかけた。そうかと思えば、ナスとトマトを水ですすいで、それらをガラス製のまな板の上に置き、ナイフに手を伸ばした。
「！？」
刃物を手にした男を警戒して、レインは反射的に身構える。が、男はそんな彼女のことなど眼中になく、野菜を切ることに没頭している。
トマトのヘタをくり抜き、そのヘタがあったところにフォークを刺して、軽く火であぶった後、弾けた皮を素早く剥いた。ナスはヘタを取り、ところどころ皮を残すように剥く。トマトとナス、どちらも一口の半分くらいのサイズになるよう切り揃えた。
えらく手慣れている。見事なナイフ捌きだ。
男は続いて、ニンニクとトウガラシに手を伸ばした。ニンニクは皮をむいてヘタを取り、中の芽も取ってからみじん切りに。トウガラシはヘタと種を取ってスライスに。それらを終えると、まな板を一度洗ってきれいにした後、裏返した。あらかじめ、冷蔵庫から取り出しておいたベーコンを、トマトやナスと同じ大きさほどに切り分けた。
あらかじめ、寸胴鍋に沸かしてあった湯に塩を少し多めに入れ、スパゲッティを茹でる。

スパゲッティを茹でている間に別のコンロにフライパンを用意し、オリーブオイルに、ニンニク、トウガラシを入れた後に火につける。弱火でニンニクやトウガラシを熱して、香りを出させる。
なんとも香ばしい匂いがし始めた。
「……」

グキュルルルゥ〜〜。

レインのお腹が悲鳴を上げる。
「すぐに出来ますから」
男は笑みを浮かべながら、木べらを取った。
オリーブオイルにニンニクとトウガラシの香りを充分に移すと、まずはナスを炒める。火を通したら一度弱火にし、スパゲッティの茹で具合を確かめる。アルデンテと呼ばれる、理想的な茹で具合とされる、一本の髪の毛ほどの芯が残るその一歩手前で、寸胴鍋の火を消す。フライパンの火を中火にしてトマトを入れ、軽く炒めたら火を消し、茹でたスパゲッティを移して和えるのだが、このとき、少量の茹で汁を取っておいて、それで塩加減を整える。胡椒で風味を整え、一般的には粉チーズとして知られるパルミジャーノ・レッジャーノを削ってかけて出来上がり。
あっという間に完成したペペロンチーノを、男はあらかじめ温めておいた皿にきれいに盛った。それをキッチンに隣接しているカウンターに並べた。レインの目の前の席だ。
「さあ、どうぞ」
男はレインに料理をすすめると、後片づけに取りかかった。料理中にも、手が空きさえすれば片づけていたため、すぐに終わった。片づけを済ませると、男は冷蔵庫の隣にあるワインセラーの中から一本のワインを選び、戻ってきた。
「この料理にはきっとこれが合うと思います。熟成されたスパイシーな風味がニンニクとマッチし、食欲を掻き立てる香りをさらに深

めてくれますよ」
　エプロンを取り去り、男は赤ワイン用のグラス二つを手にカウンターへと舞い戻った。男はまるでソムリエのように慣れた手つきでコルクを抜き、ボトルの底を持ち、レインに銘柄が見えるようにしながらボトルを傾けて、心地よい音を立てつつ、赤ワインをグラスへと注ぎ入れた。そして、そっと料理のかたわらに添えた。
「どうしました？　冷めてしまいますよ、さあ」
「……」
　出来上がったばかりの料理と赤ワインを前にし、レインは激しく戸惑っていた。彼女の心は葛藤していた。間欠泉のように噴き出す食べたいという欲求に突き動かされまいと、決して席に座ろうとしない。そんな彼女の姿を、男は苦笑いと共に眺めていた。
「ふふっ、毒など入っていませんよ」
「わっ、分かったものじゃないわ！」
　レインは間髪入れずに反論する。
「ふーむ、頑なな方ですねぇ。……分かりました。では、こうしましょう」
　男は小さな皿を取り、レインの分の料理を少し取って、食した。毒見だ。レインは男が料理を食べるのをじっと見つめていた。確認のためなのだが、どこか羨ましそうに見える。そのとき、彼女は見てしまった。男の口元に垣間見えた、白い牙を。
「これで、信用して頂けましたか？」
　口に入れたものを飲み込んだ後に、男は問いかけた。
「……い、いいわ！　信用してあげる！　でも、それはあなたを信用したからじゃない！　この料理がもったいないからよ！　いい！？　おかしな真似をしたら……！？」
　レインは銃口を男に突きつけて、一睨み。
「ええ」
　男は手を差し伸べて、レインに目の前の椅子をすすめた。
　レインは目の前の椅子を引き、男を警戒しながら素早く座った。

拳銃と小型剣を、それぞれ手元に置き、いつでも動けるようにと気を配る。
警戒させてはいけないと思っているのか、男はその場から動かず、立ったまま、自分の料理を食べ始めた。そんな男の姿を上目遣いにうかがいながら、レインは恐る恐るフォークを手に取り、料理を口へと運んだ。
「美味しい……！」
素直な感想がつい口からこぼれてしまった。レインは思わず口に出してしまったことに気づいて慌てて口を押さえるも、すでに遅く、男にはしっかりと聞かれていた。男は嬉しそうに微笑んだ。
毒が入っていないことを知ると、レインは普通に食事を楽しみ始めた。頭の片隅では、こんなことをしていていいのだろうかと思いつつも、欲望には勝てず、勝とうとも思わず、いまでは、目の前の料理を食べることだけに意識を集中させている。
「ハァ～～……」
レインはぺろりと料理を平らげてしまった。赤ワインが入っていたグラスも、気づけば空に。満足とでも言いたげな顔をしているレイン。そんな彼女のことを眺める男もまた、満足そうな顔をしていた。いつの間にやら、男は、レインの隣の席に座っており、彼女に身体を向けながら足を組んでいた。
「食事も終わったことですし、そろそろ本題に入りましょうか」
男は自ら切り出した。
「！」
レインは我に返ったようにハッとした。驚いた顔をしている。
男は気にせずに続けた。
「まずは自己紹介を。――私の名はヴァン。ヴァンピエール＝フォン＝アルフレディア＝バートリ。お嬢さん、あなたがお疑いのとおり、私は、正統なるヴァンパイア一族のものですよ」
男はにこやかな笑顔を浮かべた。
「……！？」

前触れもなく自分の正体を明かした男に、レインは呆気に取られ、呆然としてしまった。ハッとして我に返り、レインは手近に置いたあった武器を横目にチラリと見た。

「おっと、敵対するつもりはありませんよ」

レインが武器に手を伸ばそうとするその気配を察し、男は急ぐように答えた。自分には戦意がないことを表わすように、両手を少し掲げてみせる。

「あなた方、ヴァンパイア・ハンターに危害を加えるつもりは毛頭ありません」

そう言うと、男はまた笑顔を。

レインはその屈託のない笑顔を警戒しつつ、ゆっくりと手を伸ばして、小型剣を取る。

「あなた――」

レインがなにかを言いかけると、

「ああ、私のことはヴァンとお呼び下さい。ヴァンピエールというのは長い上に、古臭いですからね」

男――ヴァンは、そう言い、レインの言葉を遮った。

言葉を遮られたレインは、一度黙り、間を開け、タイミングを計り、再び口を開いた。

「……じゃあ、ヴァン。あなた、本当にヴァンパイアなの？」

怪訝そうな表情と目と、標的を狙い澄ますときのような目を交互に用いて、ヴァンを見つめる。

「ええ、ほら」

ヴァンはそのようにアッサリ答えると、自分の唇の片側を横に引っ張り、前歯を見せる。すると、牙のように鋭く尖った歯が四本、あらわとなった。上下に四本ある犬歯の部分が人の倍以上に長く、その上、牙のように鋭く尖っている。そうかと思えば、突き出ていた牙が歯茎の中に引っ込んでしまった。人よりも若干長い程度の犬歯になり、すぐにまた、獣の牙のように鋭く突き出る。どうやら出し入れ出来るらしい。それを見せてくれているようだ。

「そっ、そう……じゃあ、どうして私が、ヴァンパイア・ハンターであると？」
「それは一目瞭然ではありませんか。銀製の武器を所有しており、マントには蛇を貫いた十字架という、あなた方のシンボルマーク。それらを所有しているのを見れば、あなたがヴァンパイア・ハンターであることはすぐに分かりますよ」
ヴァンが答えると、レインの片方の眉がぴくりと動いた。どうやら、正解らしい。
「それにしても分からないのは、どうしてヴァンパイア・ハンターであるあなたが、私の前に現れたのかということです。私はあなた方に滅ぼされるような真似をした覚えは――」
ヴァンがそこまで言いかけると、
「白々しい！」
レインは声を荒げ、小型剣を突きつけた。
「人間に危害を加えたヴァンパイアが、私たちの制裁対象になっていることは、あなたも知っているはずよ！？」
「ええ、もちろん。それは存じておりますよ。だからこそ、解せないのです。私は人間に危害を加えたことなど、一度もありません。……ただし、あなたがここに来た理由は存してはいます。それは先日、林の中で発見された数名の男女のことでしょう？」
ヴァンは罰が悪そうな顔をした。
「やっぱり、あなたの仕業なのね！？」
レインは身構える。
「違いますよ。私はあなたがここに来た理由を知っていると、そう言ったのです。ヴァンパイアに襲われたらしい男女の話も、人伝に聞いたから知っているのであって、決して、その男女を襲い、危害を加えた張本人だからというわけではありません。……とはいえ、その少年少女とは少なからず面識はあるのですがね」
ヴァンはやはり罰の悪そうな顔をし、頬を掻いている。
「それは、自白と取っていいのかしら？」

「あなたも分からない人ですね……本当に頑なな方だ。――いいでしょう、説明します。少しの間、私の話を聞いて頂けますか？」
「納得が行く説明をお願いするわ」
「当然です。私も、無実の罪で滅ぼされたくはありませんからね。――あれは、三日前のことです。その日はハロウィンでした」
ヴァンは、レインに事情と経緯を説明した。
ハロウィンの夜。羽目を外した数人の男女が私有地にもかかわらず古城の中庭に侵入し、酒を飲み、麻薬に手を染め、花火に興じていた。気分が高揚したのか、噴水や石像などの所有物を壊すわ、あまつさえ、手製の火炎瓶で危険な遊びを始める始末であったと。
「それで襲ったわけ？」
「いいえ。あまりにも騒がしかったので少々脅かして、古城から追い出しはしましたが、決して、断じて、彼らを襲い、危害を加えたりはしていませんよ。血を吸うなどの行為もしていません。まあ、脅かすためにいくつかの小細工はしましたが。噛まれているように見せかけたり、血をつけてみたり」
「信じられないわね」
「ふーむ……事件の状況はご存知ですか？」
「状況？」
「ええ、林の中で発見された数名の男女の状態のことなどです」
「……何者かに襲われた形跡があり、身体の血が抜き取られていた。その首筋には二つの傷があり、それは獣にでも咬まれたような傷跡だった」
レインはいつかの野次馬の会話を思い出した。
「おおむね合っています。ただ、男女はひどい脱水症状を起こしており、その上、ひどい貧血だったということも覚えておいて下さい。そして――」
ヴァンは後ろを振り返り、手を伸ばし、カウンターを越えてなにかを取ろうとしている。その動きに警戒し、小型剣を構えるレイン。武器になるものでも取ろうとしているのかと恐れてのことだった。

しかし、ヴァンが手にしたのは、赤々とした美味しそうなリンゴ。木の皿に入れられてあったうちの一つだった。
ヴァンは正面――レインの方を向き、手にしている皮つきのリンゴを彼女に見せると、牙を突き出し、がぶりと噛みついた。リンゴを食べるのかと思いきや、ヴァンはリンゴをすぐに口から離してしまう。牙を突き立てただけだった。ヴァンはそのリンゴを目の前のカウンターに置き、そっと向きを変えた。
「私は犯人じゃない。これが証拠です」
ヴァンは、レインにリンゴに開けた穴を見せた。上下四本ある牙でつけた穴は、全部で四つある。
「林の中から発見された男女の首筋にあった傷が二つだと言ったのは、あなたですよね。ですが、これを見ても分かるとおり、もし私が犯人であれば、その傷は二つではなくて、四つあるべきなのです。このリンゴのようにね」
「どっ、どういうこと……！？」
「我々ヴァンパイアの牙は、人間の犬歯と同様、上下左右合わせて、計四本あるのです。だから、我々が人を襲い、咬み、血を吸ったのであれば、傷は必ず四つ出来るのですよ。念のために言っておきますが、このように牙を出し入れすることは出来ますが、一本だけ、上だけとか器用な真似は出来ませんから、あしからず。なお、これは私だけの話ではありません。すべてのヴァンパイアに対して言えることです。ですから、あれは私の仕業ではありません」
ヴァンはキッパリと言い切った。
「……」
無言のレイン。彼女は明らかに戸惑っている。表情にもそれが表れている。
「それに加えて、あのとき、あの数名の男女は、多量のアルコールを摂取しており、質の悪い麻薬もたしなんでいました。そんな汚れた血など、私は飲みたくありませんね。そもそも、私は正統なるヴァンパイア一族ですよ？　その私が直接血を吸ったりしたら、あの

男女はまず間違いなく、吸血鬼化することでしょう。もうすでに変化が起きていてもおかしくはない。ですから、もう一度言いますが、あれは私ではありません」
ヴァンは真っ直ぐにレインの目を見つめ、もう一度キッパリと言い放った。その目は、嘘をついていると、勘ぐらせるようなところは微塵も見られない。
「そんな、まさか……！？」
愕然とするレイン。小型剣を突きつけていた手がダラリと下がる。
「分かって頂けましたか？」
ヴァンはホッとした。
「犯人を間違えていたというの……？　間違った相手を殺すところだった……？」
「ええ、危うく。冤罪で殺されるところでした」
ヴァンは呆れたように苦笑した。冗談を含めるような言い方をしたつもりだったのだが、
「……ごめんなさい。間違っていたことを、素直に認めるわ」
レインはそれを非難と捉えたらしく、がっくりと項垂れてしまった。申し訳無いとばかりに、深く頭を下げた。
「ああ、いやいや、分かって頂ければそれで――」
予想していた反応と異なり、少し戸惑ってしまうヴァン。笑顔を浮かべ、さも気にしていないとアピールする。しかし、レインの意気消沈はかなりなもので、ヴァンの様子など眼中にない。
レインは手にしていた小型剣をそっとカウンターに置いた。
「どう謝ればいいのかしら……まさか、こんなことになるなんて……」
レインは両手で顔を覆った。
「まあ、疑われたことは事実ですが、あなたも、正義の名の下に仕事を全うしようとしていたわけですからね。結果的には被害はないわけで、私自身さほど気にしていませんし、だから、あなたもそう気にせず――」

ヴァンがそこまで言いかけると、
「ヴァンパイアに同情されるなんて……ヴァンパイア・ハンターとして失格だわ……」
レインはひどく思い詰めていた。自分が何気に失礼なことを言っているのにも気づいていないようだ。
「ふーむ……」
そんなレインの姿を、ヴァンはどうしたものかと悩みながら眺めている。
「――おお、そうだ」
ヴァンは手を打った。手を打つという、古典的な思いついたときの手法をしてみせた。
「聞いて下さい。私が無実だということは、別に、男女を襲った犯人がいるということになります。その真犯人を協力して捕まえましょう」
「……ええっ！？」
一拍おいて、レインはひどく驚いた。
「真犯人はいまも野放しな状態です。このままでは、第二、第三の被害者が出るかもしれません。そうなれば事態は悪化し、もしかしたら応援が寄こされるかもしれない。そうなれば、ヴァンパイアである私はますます立場が危うくなり、あなたも、重大なミスを知られてしまうかもしれない。そうなれば、お互いまずいことになりますよね？」
人差し指を立てながら、ヴァンはゆっくりと顔を近づける。妙な威圧感がある。
「たっ、確かに……」
ゆっくりと迫ってくるヴァンに、レインは無理やり納得させられた。
「ですから、ここは共同戦線というのはどうでしょう？　ヴァンパイア、ヴァンパイア・ハンターの垣根を越えて、真犯人を捕まえるために協力するのです」

「そんな……そんなこと！　前代未聞だわ！　許可、出来るはずが……」
「いいんですか？　相手を間違えた、なんてことが知れたら……」
「うっ」
痛いところを突かれた。レインは心に槍が突き刺さったような気分がした。
「無実のヴァンパイアを滅ぼすところだったなんて知られたら、ただでさえ、天敵という間柄の両者の間に火種が生まれ、最悪、戦争に発展するかもしれませんよ……？」
「ううっ」
もう一度、グサリと心を貫く見えない槍。レインの脳裏では、ヴァンパイアとヴァンパイア・ハンターによる大戦争の光景が浮かび上がっていた。
「私としても、自分の縄張りを荒らすような存在は放ってはおけません。今回のようなことがまた起きるとも限りませんからね。それに、ヴァンパイアにとって天敵であるヴァンパイア・ハンターのあなたの行動を把握しておく必要もある。私としても、あなたがこの土地にいる間は監視しておきたのです。その上、あなたの無事も確保しなければならない。あなたになにかあれば、ますます立場が危うくなり、新たに、あなたのような方が来る」
「なるほど」
「これは命令や譲歩などではありません。お願いです。ヴァンパイアの領地を荒らす輩の逮捕に協力して欲しい。これで、いかがでしょうか？」
ヴァンは上目遣いになり、レインの顔を覗きこんだ。
「……い、いいわ、協力しましょう。そこまで言われたら、こちらとしても引き下がれないもの。でも、ちょっとでもおかしな真似をしたら、そのときは躊躇なく引き金を引かせてもらうわよ？　いいわね？　これは警告だからね？」
レインはカウンターに置いてあった拳銃を取り、ヴァンに銃口を

向けた。
「ええ、問題ありません。肝に銘じておきましょう」
ヴァンは一度だけ頷くと、そっと手を差し伸べた。
「なに？」
「人類にとっての友好の証です。握手ですよ」
「ああ……本当、前代未聞だわ」
レインは少し躊躇しながらも、握手に応じた。
「短い間だろうけど、宜しく」
レインはそっと、ヴァンの手を取った。
「ええ、こちらこそ、宜しくお願いします」
ヴァンもレインの手を軽く握った。一度上下に振り、二人は握手を交わした。
「ヴァンパイアがこんなに紳士的だなんて、初めて知ったわ……」
手を離しながら、感心した様子でレインは言った。
「正統なるヴァンパイアはたいてい貴族で、爵位を持っています。皆、紳士淑女ですよ」
「へぇ……」
レインは素直に感心している。
「あ、そういえば、あなたはどうして灰にならないの？」
レインはおもむろに眉を顰めた。
「灰に、ですか？」
急なその質問に対して、ヴァンも眉を顰める。
「ヴァンパイアは、太陽の光を浴びると灰になるっていうじゃない」
「あれは風説に過ぎませんよ。灰になどなりません。それに、私の趣味は日光浴です」
「あ、そう……」
「他にも、ニンニクが嫌いだとか、十字架が苦手とかありますが、それらも単なる風説に過ぎません。さきほどの料理でも分かるように、私はニンニクが大好きですし、私は一応、クリスチャンですからね」

ヴァンは胸元に下げていた十字架のネックレスを見せた。
「驚いたわ」
レインは呆気に取られている。
「巷で囁かれているヴァンパイアに関する知識は、そのほとんどが根も葉もない噂に過ぎません。所詮は作られたもの、フィクションですよ」
「じゃあ、銀も意味がないの」
レインは小型剣を手に取った。
「おっと！　それはダメです！」
ヴァンは慌てて身を仰け反らせた。
「え？」
「ヴァンパイアにとって銀は大敵です！　銀は人間にとっても毒物なんですよ？　影響が出るには大量に必要ですから、通常、触れる分には問題はありませんが、銀に対して強いアレルギーを持つ方もいらっしゃいます。我々、ヴァンパイアにとっては、極少量、わずかな量の銀でも致命傷になってしまいます……！」
ヴァンは途端に深刻な顔になり、早口で説明した。
「へぇ、そうなんだ」
レインは感心しつつ、小型剣を手でもてあそぶ。
「ええ、ですから、近づけないでくださいね、お願いですから」
ヴァンは銀のものに触れぬようにと、必死に身体を遠ざけている。
「いいことを聞いたわ。あなたといると、ヴァンパイアに関することが色々と手に入れられそうね。情報収集になっていいわ」
レインは不敵な笑みを浮かべた。
「うっ、それは困りますね」
「ふふっ、天敵に一族の秘密を明かすから？」
レインは斜に構えながら問いかける。
「ええ、どうしたものでしょうか……とはいえ、間違った知識を世間に流したままというのも気に食わない。川を越えられないだとか、几帳面だから、種をばらまくと拾わずにはいられないだとか、全く

もってありえない。鏡に映らないわけがないじゃないですか！」
ヴァンは興奮し、捲くし立てた。
「わっ、私に怒らないでよ……！」
迫ってくるヴァンに対し、レインは身を退いた。
「いいでしょう！　真実のヴァンパイアというものを知ってもらうためにも、仕方のない犠牲です」
ヴァンは一度だけ拍手を打った。自分の中で決定したようだ。
「じゃあ、協力をお願いするわね。――それで、これからどうするの？」
レインは不意に真面目な顔をする。仕事モードとでも言うのだろうか。
「そうですねぇ、まずは現場を見てみましょうか。現場には犯人に繋がる証拠が残されているかもしれませんし」
ヴァンは顎に手を添えて、少し考えた後に答えた。
「でも、警察がほとんど探し終えているんじゃない？」
「人間には分からない証拠があるかもしれませんよ」
ヴァンは不敵な笑みを浮かべた。
「ふーん」
「それでは、少しばかり時間を頂けますか？」
ヴァンは席を立った。
「時間？」
レインも席を立つ。
「外に出る準備をしますので」
「準備って、なんの？」
「着替えとお化粧ですよ」
ヴァンは人差し指を立てて、にっこり笑いながら答えた。
「はあ？」
レインはおかしな顔をした。

（4）

事件現場である林を、二人の人物が歩いている。一人はレインだ。だぶついたオーバーコートを羽織っている。

戦闘服ではいやでも目立ち、プロテクターで隠せているとはいえ、身体のラインが見えてしまう恥ずかしさもあり、背中のバックパックに押し込んであった緊急時用の普段着に着替え、ヴァンに借りたオーバーコートを身にまとい、外観をとりあえず整えた。

ヴァンは長身で、レインと比べれば頭二つ分は飛び抜けている。普段着用として最初に渡されたロングコートではその裾を地面に引き摺ってしまい、それでは歩行に支障を来たすとして、クローゼットの奥から引っ張り出した、使い古されたハーフコートを羽織っている。そのため、ちょっと防虫剤臭い。

レインの隣を歩いているもう一人は、襟を立てたコートにシルクハットを目深にかぶり、口元をマフラーで覆い隠し、サングラスをかけ、白い革製の手袋をしているというどこか不思議な人物だった。顔の判別が出来ず、肌すらも露呈していないその姿はあからさまに怪しい。

「変質者……」

隣を歩くその人物の姿を横目に見つめ、レインは眉を顰めた。

「またですか？　いい加減、慣れてほしいですねぇ……」

その声はヴァンのものだった。

「でも、もう少しマシな格好は出来なかったの……？」

一緒に行動しているのが恥ずかしい。レインの表情はそう物語っている。

「仕方がないでしょう、全身にファンデーションを塗っているとはいえ、この青白い肌を露呈するわけにはいきませんし、瞳の色はともかく、この牙だけは見せられませんから」

ヴァンはマフラーを少しずらし、四本の牙を見せた。

「それはそうだけど……ヴァンパイアとしてではなく、変質者として、立場が危うくならないかしら……？」
「そのときは、そのときですよ」
ヴァンはまたマフラーを戻し、声だけで苦笑い。
「まるで、日光を避けているような格好だわ」
ヴァンが歩く姿を見つめ、レインは答えた。
「そのとおりです。鋭いですねぇ。――我々は古来から、光の下を避けるようにして生きてきました。ですが、それは日光が苦手という意味ではなくて“日の当たる場所”を意味しています」
ヴァンは人差し指を立てた。
「なるほど。それがおかしな形で伝わって、あなたたちヴァンパイアが、日光が苦手だという間違った情報が生まれたわけね」
「そのとおりです」
ヴァンは大きく頷いた。目深に被っているシルクハットがかくりと揺れた。
ヴァンとレインの二人は、林道を平行する形で林の中を歩いている。
立ち入り禁止を表わす黄色いテープを前にして、二人はその足を一度止めた。
「警察がいないわね」
レインは周囲を見渡した。彼女の言うとおり、警官の姿が見当たらない。テープはそのまま残されているが。
「田舎の町の警察ですからね。場所も、このような林です。事件性がないと判断すれば、このようなところに人員を割きはしないでしょう」
ヴァンは苦笑した。
「職務怠慢ね」
レインは呆れたように呟いた。
「町を守るのが、彼らの職務ですからね」
ヴァンは苦笑を続けている。

「ですが、我々にとっては好都合です」
そう言うと、ヴァンは目の前のテープを潜り抜けた。
「まあ、確かにね」
レインも、ヴァンに続けとテープを潜った。
立ち入り禁止を表わすテープは、林道から近い場所にのみ張り巡らされていた。数人の男女が発見されたというのは、そのテープよりも奥の林の中。それらしい印がとある木に貼りつけてある。二人は腐葉土を踏み締め、その印がある場所に向かった。
「ここ、みたいね」
レインはまた、周りを見渡した。警戒しているようにも思えるが、本当にここなのかと確認しているようにも思える。
「証拠なんか残っているのかしら？」
レインは腰に手をやり、空を見て、地面を見た。
「証拠になるものは見当たりませんが、分かることはありますよ」
「なに？」
レインがそう問いかけると、ヴァンは人差し指を立てた。
「まず、これは野生動物の仕業ではありません。木の幹や根に爪痕はなく、糞や抜け毛も見当たらない」
ヴァンは林の各所を指差した。
「よく見ているわね」
レインも、ヴァンの指先を目で追った。
「そもそも、これが野生動物の仕業であれば、それはまず肉食と考えるべきであり、そうなれば、襲われた男女はすでに食い殺されていることでしょう。運よく助かったとしても、目立った外傷があるはずです」
「確かにね」
レインは肯定せんと頷いた。
「男女に外傷はなく、あったのは首筋の傷だけ。その他の情報としては、貧血状態に陥るほど血液を抜き取られていたこと。血を吸う生物を考えれば、吸血コウモリやヒルなどですが、この林にヒルは

いますが、吸血コウモリなどいません。そもそも、そういったのがいればまずそちらが疑われるでしょう。なお、例えヒルに襲われたとしても、貧血に陥るほど血を抜かれることはまずないでしょう。まあ、全身を覆い隠すほどの、大量のヒルに襲われれば、あるいは……」

「キモイ……」

想像してしまったのか、レインは身震いしている。

「犯人が野生動物であれば、必ず証拠が残っている。ここに、なんら証拠が残っていないということは――」

「犯人は人間？」

レインが先に答えた。

「その可能性が高いでしょうね」

ヴァンは頷いた。シルクハットがかくりと揺れる。

「でも、そうだとしたら、犯人を特定するのは難しいわね。だって、証拠がないんだもの」

「証拠がないとは言っていませんよ」

「え？」

「警察にも分からなかったようですね。少し離れているし、朝方は霜が下り、雨が降った翌日のように腐葉土の香りも強い。――ですが、私たちには分かる」

ヴァンは歩き出した。そして、ある場所で立ち止まった。

「なんなの？」

ヴァンは地面を指差していた。後を追い、確認するレイン。しかし、彼女には、そこになにかがあるようには見えない。

「この地面に大量の血液が染み込んでいます。見た目には分かり難いかもしれませんが」

「本当に？　――ちょっと待って」

レインはウェストバッグからなにかを取り出した。ペンライトのようなものだ。それに小さなスプレー缶。

「それは？」

「これで、血液かどうか分かる」
レインはスプレー缶を振り、なにかの液体を地面に散布した。そして、すぐにそのペンライトで地面を照らした。すると、その一部の地面だけが淡く光った。
「血液の可能性が高いわ……どうして分かったの？」
「我々ヴァンパイアは、血液に関してだけは嗅覚が鋭いんです。人間では腐葉土の臭いに誤魔化されてしまうかもしれませんが、私にはこの中でも、ハッキリと血の臭いが分かります」
「すごいわね」
レインは素直に感心している。
「より長く生存するために得た能力だと思います。安全な血液を選ぶために進化したのでしょうね」
鼻に触れながら、ヴァンは言った。
「安全な血液？」
「人間も様々ですからね。特にいまはエイズなどの伝染病が流行しています。昔であればペストだとか。我々ヴァンパイアも、そういった病気に関しては人間と大差ありません。多分、エイズにも感染するでしょう。だからこそ、その人間の血を吸っても安全かどうか判断するため、嗅覚が鋭くなったのでしょうね」
「ふーん」
「私自身も感心しますよ。血液の臭いを嗅いだだけで、それが男性であるか女性であるか、子供か老人か、健康であるかそうでないか。その人間が、アルコールやニコチン、麻薬を摂取しているかどうかも分かりますし、さらにいえば、その人間が、嘘をついていたり、動揺していたりしても分かります。後、女性であれば生理とか……」
「それはすごいわね。便利な能力だわ。生理は余計だけど」
「すみません。――とはいえ、その代償として我々は一週間に一度、人間の血液を一定量摂取しなければ死んでしまいますがね」
ヴァンは鼻で溜め息をついた。
「……だから、人を襲うの？」

「昔の話ですよ。いまでは人を襲うことなく、健康的な血液を手に入れています」
「どこからそんな血液を……？」
「あまり、秘密を明かしたくはないのですが、簡単にいえば、献血です」
「まさか！？」
「これ以上は言えません。秘密です。でも、人を襲うよりはいいでしょう？」
「……」
その問いに対し、レインは無言。肯定も否定も出来ない、とそう答えているかのようだ。そんな彼女の表情を横目に眺めつつ、ヴァンはその場にしゃがみ込んだ。
「ふむ。――レインさん、なにか入れ物はありますか？」
「レインでいいわ。――採取するってこと？」
「じゃあ、レイン。――ええ、そのとおりです」
「じゃあ、はい、これを使って」
レインはコートの内側に手をやり、ウェストバッグから口を閉じられるタイプの小さなビニール袋を取り出した。警察が証拠を入れるときに用いるようなビニール袋だ。
「ありがとう」
ヴァンはそのビニール袋を受け取り、血液が含まれた地面の一部を採取した。
くんくん――
袋の口に鼻を近づけて、ヴァンは臭いを嗅いだ。
「……さきほど、あなたに、我々が血液を欲する理由を説明したのには訳があります」
臭いを嗅いだ途端、ヴァンは表情を少し強張らせた。しかし、レインからは見えない。
「訳？」
「私は今回の事件が、ヴァンパイアによるものの犯行だとは思って

いませんでした。そう確信していたところもある。何故なら、現在のヴァンパイアはまず人を襲わないからです。その理由はあなたたち、ヴァンパイア・ハンターの存在です。人間に危害を加えたヴァンパイアに制裁を加える存在。あなた方が存在し始めてから、我々ヴァンパイアは、人間を襲い、血液を得ることを極力控え、そして、やめるようになりました。身の安全もあるのですが、人間を襲って血液を得るのはリスクも伴う。さきほども言った、不健康な血液のことです。不特定多数の人間を襲っても、その一部には必ず、不健康者が混じっている。人間が安全な食材を好んで食べるように、我々も、安全な血液を摂取したい。だからこそ、もう人間を襲うような真似はしなくなった」

「でも……？」

「ええ、それでも一部のヴァンパイアは人を襲う。人間でいう破壊衝動、殺人衝動に駆られた犯罪者のような存在です。そういったものたちは徐々に駆逐され、いまでは少ない」

「……」

レインは小さく頷いた。納得、だろうか。

「人間の社会に国や州などがあるように、我々にも縄張りというものがある。それを犯すことは、国境をパスポートも持たず、無断で越えるようなものです。不法入国者だ。他の縄張りの中で人間を襲うなど言語道断。あなたがたヴァンパイア・ハンターが出向かなくとも、その縄張りの代表者が捕らえ、ときに制裁を加える。ちなみに、ここらの縄張りは私の所有物です。ここら一帯の土地も、ですがね」

ヴァンは足元を指差した。

「わーお……！」

レインは肩を竦めた。

「だからこそ、これがヴァンパイアによる犯行ではないと確信があった。ですが、ときに、よほど血に飢えた流れ者のヴァンパイアが現れることも稀にある。だからこそ、確認したかったのです。自分

の目で」
「で、どうだったの？」
「これはヴァンパイアの犯行ではないと、より確信しましたよ」
ヴァンは立ち上がった。
「その理由は？」
「この地面に染み込んだ血液です。もしヴァンパイアであれば、たとえ危険を冒してでも、それが不健康者の血液であっても、生きるためには襲い、その血を確保します。しかし、このように、そんな大切なはずの血液を捨ててしまっている。血に執着を見せず、肉にも興味を持たない。つまり、ヴァンパイアでもなければ野生動物でもない。これは、人間の犯行ですよ」
ヴァンはキッパリと言い切った。
「あなたにそう断言されると、なんだか説得力があるわね」
レインは腰に手をやり、小さな溜め息を漏らした。
「信じて頂けますか？」
「信じたい、といえば嘘になるわね。でも、ここは信じるべきでしょう」
「ふっ、正直な方だ」
ヴァンは苦笑いを。
「犯人は人間……」
レインは眉を顰めた。
「精神病の一種で似たような症例を聞いたことがあります。吸血病だとか、自分をヴァンパイアと思い込んでしまうものだとか」
「へぇ」
「後は、そうですねぇ。ヴァンパイア・ハーフによる犯行、という可能性もありますね」
「ヴァンパイア・ハーフ？　それは、人間とヴァンパイアの間に生まれた存在ってこと？」
「いいえ、違います。ヴァンパイア・ハーフとは、ヴァンパイアに血を吸われたことで、半吸血鬼化した人間のことですよ」

「そ、そんなのがいるの……？」
レインは初耳だと言わんばかりの顔をした。
「知らなかったのですか？　ヴァンパイア・ハンターともあろう方が」
ヴァンは不思議そうな顔をした。
「だって、今回が初任務なんだもん……」
レインは唇を尖らせて、もじもじしながらそっぽを向いてしまった。
「ああ、新人の方……でしたか」
ヴァンはどこか納得した。
「……」
そんなヴァンの反応に、レインはちょっとムッとしている。
「オホン！　――とりあえず、犯人と思われるのはそんなところでしょうか。後は未確認生物として有名な、チュパカブラとか」
ヴァンは誤魔化すように咳払いをした。
「……なにそれ？」
「地球外生命体だとか、未知の生物だとか言われています。家畜を襲うそうですよ」
「フー……とりあえず、あなたの言葉を信じるとして、その、犯人を特定するような能力とか、そんな便利な能力はあなたたちに備わってはいないの？」
レインは細く溜め息をついた。
「あ、無視しましたね……残念ながら、ヴァンパイアといっても万能ではありません」
「そう」
レインはちょっとだけ残念そうな顔をした。
「ただ、分かっていることはいくつかありますよ」
「え？」
「まず、この状況からでは犯人が男か女かは分かりません。単独犯なのか複数犯なのかも分かりません。ですが、男女を襲っても殺め

てはいないことから、犯人に殺人衝動は見られません。血を抜いていることから、吸血鬼という存在や血に対してだけ執着。もしくは固執していると思われます。しかし、せっかく抜いた血を捨ててしまっていることから、固執しているのは吸血鬼の方ではないでしょうか。単なる愉快犯や、世間を騒がせたいという悪質なイタズラの可能性も否めませんね」

ヴァンはそう口に出しながら歩き出し、林道へと戻り始めた。

「事件現場は街から離れた林の中。林道とは近いですが、それでも、極端に人気の少ない場所です。この道路も交通量が少ない。そのことから、犯人がこの道を通る不特定多数の人間を襲わんと待ち構えていたとは考え難い。襲われた男女と犯人は、不意な遭遇によるものではなかったでしょう」

立ち入り禁止のテープの前でヴァンは止まった。

「酒や麻薬に溺れていたとはいえ、数名もの男女を、衝動的に襲うとは考え難い。もしかすると、男女と犯人は面識があったのではないでしょうか。そして、男女に対して恨みを抱いていたかもしれない。まあ、私の屋敷の中庭であれほどに暴れていたことから、普段から素行は悪かったでしょうし」

「……面識があり、恨みを抱く人物としてまず思いつくのは、あなたね」

レインは隣に立つと、ヴァンの顔を指差した。

「……それらを前提に考えると、これは突発的なものではなく、計画的な犯行の可能性が高く、また、数名の男女を襲ったことから、犯人は人並み以上の体力を持っており、その知能も高い。移動させた形跡がないことから、犯人は複数ではなく単独でしょう」

「ますます、ね」

「ま、まあ、こんなところでしょうか」

近づいてくるレインから、ヴァンは少し逃げている。

「なかなかの推理ね。まるで探偵のようだわ」

「この程度の推理では、探偵とは呼べませんよ」

「そうかしら？」
「ええ、探偵というのはもっと偉大な存在です」
ヴァンは自分の胸に触れた。
「……探偵に対して、思い入りがあるみたいね？」
「イギリスを代表する、かの探偵の生涯を描いた物語は私の愛読書であり、私が尊敬する人物の一人です……！」
ヴァンは拳を掲げてみせた。
「あ、あなた、シャーロキアンなのね……」
レインはうっとうしそうな顔をしている。
「ええ！」
ヴァンはなんとも誇らしげに答えた。
「と、とりあえず、数名の男女の身元を探ってみるわ。犯人に繋がる手がかりが見つかるかもしれない」
「精神病院に該当するような患者のデータがないかも調べてみて下さい」
「分かった。それにはまず、警察の協力が必要ね」
「私はヴァンパイアですから、そこはお任せします」
「なんとかしてみるわ……」
憂鬱気味な顔をし、レインは自分の携帯電話を取り出した。ヴァンから少し距離を取り、どこかにかけている。
「……」
ヴァンは、レインの電話が終わるのを待つかのように、ふらふら辺りを散策するふりをしながら彼女に背を向けた。コートのポケットからあるものを取り出した。それは、さきほど採取した、血が染みこんだ腐葉土。ヴァンはそっと臭いを嗅いだ。
「……これは、初期段階かもしれないな」
ヴァンの顔色が変わる。
「――ヴァン」
後ろから声をかけられ、ヴァンは素早くそれらを隠した。
「はい？」

ヴァンは笑顔を浮かべて振り返った。マフラーで隠れて見えないが。
「地元警察に協力を取り付けたわ。行きましょう」
そういうと、レインはテープを潜り抜けた。
「分かりました」
返事をしつつ、ヴァンは採取した腐葉土を仕舞った。レインを追い、ヴァンもテープを潜り抜けた。
レインは、ヴァンに背を向ける形で林道に佇んでいた。複雑な顔をして、手の中で携帯電話をもてあそんでいる。
「……彼のことは言えないわ。面倒なことになる」
レインは決心を固めたように、携帯電話をポケットに仕舞った。

ヴァンとレイン。
互いに心に秘密を抱えながら、警察署へと向けて林道を歩き出した。

（5）

「あんたが、レイン＝コルネットさんかい？」
警察署をおとずれたヴァンとレインの二人を、静かな受付のカウンターで待っていた、一人の警官が出迎えた。中肉中背の白人男性。二人の視線をまず注目させたのは、もじゃもじゃとした天然パーマの頭と顎ひげだった。帽子をかぶればはみ出しそうだと、二人は何気に意見が合った。
「ええ、私がレインです」
何度か、頭と顎ひげを往復しつつ、レインは返事をした。サングラスで目を隠しているヴァンは、目線を気づかれないのをいいことに、じっと注目していた。
「えーっと、どこだったかな。なんとかってところから連絡をもらってある」
「ＨＶＨ。通称、ハーヴィッチ。イギリス支部のものです」
レインは手帳を取り出し、警官に見せた。蛇に突き立てられた十字架の紋章が施されている。
「ああ、それだそれ。よくは分からないが、署長からも協力してくれと頼まれている」
レインの言うとおり、話はついているようだ。
「宜しくお願いします」
レインは手帳を戻し、握手を求めた。警官は気軽に握手に応じる。形式的な握手を交わした。
「ここではなんだから、とりあえず、俺のデスクに来てくれ」
警官は二人に、こっちに来てくれとばかりに手招きした。二人は警官に従い、同行する。
警官の案内の下、二人は警察署内の廊下を進む。
警察署という場所は騒々しいものだと連想させるが、田舎町の警察署ともなれば静かなものだった。受付のベンチには一人か二人。

途中で手錠をかけられた人物と擦れ違うも、テレビや映画とは違って大人しいものだった。白いブリーフ一丁だったのが気になるが。
「……そこのも、あんたんところの人かい？」
警官は後ろを振り返り、あからさまに怪しい身形をしているヴァンをジロリと見た。
「ああ……ええ、私の同僚です。彼のことは気になさらず。紫外線アレルギーなんです」
レインは少し返答に困るも、すぐに機転を利かせた。
「紫外線アレルギー？　それって確か、太陽に当たると皮膚が腫れ上がるって奴かい？」
「ええ、ですからこんな怪しい格好を」
「ふーん、そうかい。そいつは辛いなあ」
警官はヴァンのことを同情している。
「……」
ヴァンは警官に答えるように小さく頷いた。
（紫外線アレルギーですか……うまく誤魔化したものですねぇ。とはいえ、ヴァンパイアらしいといえば、らしいですが……）
マフラーの下で、ヴァンはぶつぶつと独り言を呟いていた。
廊下を進んでいた警官は、とある部屋の前で立ち止まった。ここだと教え、警官は先に入っていった。少年課と扉には書かれてあった。閉まりかける扉をヴァンが手を伸ばして止め、レインが先に扉を潜り抜けた。ヴァンも後に続く。
警官はすでに奥へと進んでいた。二人が後を追おうとする頃には、とあるデスクの前で立ち止まっていた。
「それじゃあ、自己紹介しておこうか。俺はグレッグ。グレッグ＝アーランドだ。ここ、少年課の人間だ。あんたはレインさんで、そっちは？」
「……ヴァンだ」
「ヴァンさんか。――一昨日、林の中で発見された悪ガキ共のことだったな」

警官――グレッグは、散らかったデスクの上を漁り出した。
「ええ。彼らの身元が特定出来るような資料と、現在の彼らの居場所を教えて頂きたいんですが」
「同じ内容の電話を受けてある。もう用意してあるよ……これだ」
グレッグは探し当てた書類の束をレインに差し出した。用意してある、とそう聞こえたのだが……？
「その中に、あの子らが入院している病院の名前も書かれているだろう。そう、広くない街だから、探すのはたやすいよ」
「ありがとうございます」
「一応、資料だからさ、コピーするなり、暗記するなりしたら返してくれよ」
グレッグは書類を指差した。
「ええ。じゃあ、コピー機を借りても？」
「ああ、向こうの使ってくれ」
グレッグは部屋の角にあるコピー機を指差した。コピー機の場所を特定して、レインは一度頷き、資料を抱えて移動した。そんなレインを、ヴァンはその場に留まり、見届ける。
「仕事に忠実といった、クールな子だな。美人だが」
レインの後ろ姿を見つめ、グレッグは呟いた。
「……美人、だというところには同感」
ヴァンは腕を組み、グレッグ同様、レインの後ろ姿を眺める。
「ハーヴィッチだったか……？　聞いたことのない名前だが、どんなところなんだい？」
詮索するようにグレッグは問いかけた。
「……出来て間もないから、知らないのも無理はない。ハーヴィッチは……麻薬を専門に取り締まる、国際特殊捜査機構だ」
ヴァンは少し考えた後、適当に答え始めた。
「ああ……麻薬か。それで、あの悪ガキ共をな……」
ヴァンの適当な答えに対し、グレッグは妙に納得している。適当に答えたヴァンの方が驚いている。

「……認可されていない麻薬を専門に取り締まるのが、我々、ハーヴィッチの仕事だ」
ヴァンはとりあえず続けることにした。
「なるほど。……そういえば、あの悪ガキ共、おかしな薬を持っていたなあ」
思い出したように、グレッグは答えた。
「……おかしな薬？」
「ああ、錠剤のタイプだ。赤黒い奴だよ。資料に挟んであったと思うが」
グレッグは親指と人差し指で輪を作った。丸い錠剤と言いたいのだろう。
「……ありがとう。確認してみるよ」
ヴァンは小さく頷いた。シルクハットがまたも揺れる。小さく。
「見た目はなんだが、あんた、意外ときさくなんだな」
悪い印象は与えなかったようだ。
「ふっ」
ヴァンは苦笑し、資料をコピーしているレインの元に向かった。
「……なにを話していたの？」
ヴァンが隣に立つと、レインは振り返りもせず、問いかけた。
「世間話を少々」
「余計なことは言わないでよね」
「ふふっ、分かっていますよ。それより、少し資料を見せて頂けますか？」
「うん」
レインは資料を差し出した。
「ありがとう」
ヴァンは、レインの手から資料を受け取ると、パラパラとページをめくった。すぐに、口の閉じられた小さなビニール袋を見つけた。中に赤黒い錠剤が入っている。
「これか……」

ヴァンはビニール袋の口を開けて、中の臭いを嗅いだ。
「……まさか？」
ヴァンの表情が急変し、険しさを帯びた。
「成分を調べなければ、確かなことは分からないが……」
ヴァンは赤黒い錠剤を睨むように見つめている。
「――ヴァン」
「あ、はい？」
レインに声をかけられ、ヴァンはハッとした。
「必要な資料は手に入れたわ。病院の場所も分かった。行きましょう」
「分かりました」
ヴァンは手にしていた赤黒い錠剤入りのビニール袋を資料に戻し、閉じてレインに差し出した。レインは資料をグレッグに返すべく、歩を進めた。
「もういいのかい？」
資料を受け取りながら、グレッグは確認する。
「ええ、必要な書類はコピーさせて頂きました。ご協力、感謝します」
レインは頭を下げた。
「病院へ向かうのかい？」
「ええ、そのつもりですが」
「じゃあ、連絡を入れておこう。君らが来ることを伝えておくよ」
「ありがとうございます」
再び、頭を下げ、レインはグレッグの元を去った。グレッグは後ろで手を振っていた。
すでに部屋の外に出ていたヴァンと合流し、レインは警察署を後にした。
外の駐車場で足を止め、レインはコピーした資料に目を通した。
「歩いていくには、ちょっと遠いわね」
「タクシーを停めましょうか？」

「その姿で停まってくれるかしら……？　――ここなら、ホテルが近いわ。私の車を使いましょう」
「その方が経済的ですね」
二人はホテルに向かって歩き出した。
「――彼らはハイ・スクールなのね。未成年の飲酒に麻薬。こってり絞られるわね」
資料に目を通しながら、レインは意地悪そうに笑った。
「不法侵入に、器物破損も加えて欲しいです」
「あなたが訴えれば、足されるんじゃない？　訴えられれば、だけど」
レインは意地悪そうな笑みを続けた。
「両親を心配させて、悲しませて、悪い子たちね、この三人は……」
一転して暗い顔をしながら、レインは男女三人の顔写真を、隣を歩くヴァンに見せた。
「三人……？」
ヴァンはハッとして立ち止まり、レインの手元に顔を近づけた。
「え？」
「屋敷にいたのは、四人でしたが？」
「本当に？」
「ええ、ついこの間のことです。忘れるはずはありませんよ。男子が二人。女子が二人の計四人でした、間違いない」
「じゃあ、一人足りないってことね。ここには二人の男子と一人の女子の名前があるから、いないのは女の子ね。逃げたのか、それとも、連れ去られたとか……？」
二人は険しい顔を見合わせた。

数分そこらでホテル裏の駐車場に到着した。
レインは運転席側のドアのロックを外して乗り込み、助手席側のロックを外した。
「とにかく、どちらにしても病院に行きましょう。この三人の状態

も見たいし、きっと、親がいるわ。なにか、話が聞けるかもしれない」
レインは運転席に座り直した。
「安全運転でお願いしますね」
ヴァンは助手席に乗り、なによりもまずシートベルトを締めた。ちゃんと作動するか、ぐいぐいと何度も引っ張り、確認している。
それを横目に、レインは強めにドアを閉めた。
「洒落ているとは思いますが、それにしても、狭いですね……」
シルクハットが天井に当たっている。
「文句言わないでよ。私だって言いたいんだから」
「では、あなたが選んだわけでは――」
「誰が好き好んでこんな車！　私が好きなのはスポーツカーよ！　ポルシェ！」
レインは差し込んだキーを回し、エンジンをかけた。
「せめて、イギリスの車を選んで欲しいですね、英国紳士としては……」
丸っこい形をしたクラシックカーはまもなく走り出し、早々と病院を目指した。
車が病院の前に到着したのは、警察署からホテルの駐車場までにかかった時間よりも、わずかに長かった。
車内から見えた病院の外観は、さほど大きなものではなかった。
車を駐車場に停めて、足早に受付へ。
受付で話を通した二人は、三人の男女がいるという部屋に向かうべく、エレベーターに乗り込んだ。
説明どおりに進むと、三つの個室が並ぶ廊下に行き着いた。個室の扉の表札には、それぞれ、資料にある男女と同じ名前が記されてあった。
とりあえずと、これといった狙いもつけず、レインは一番手前の部屋を覗きこんだ。
病院の個室など、どれもそう代わり映えしないものだが、そのべ

ッドには資料の写真に写っている、三人のうちの一人である男子が仰向けに横たわっており、そのかたわらには家族と思われる人物の姿も見られた。
「どちらさま……？　警察の方？」
「そのようなものです」
レインは手帳を提示した。
「私たちは、ＨＶＨ――通称、ハーヴィッチと呼ばれるところから派遣されてきました」
「ハーヴィッチ……？」
耳にしたことがないのだろう。その顔は戸惑っている。
「我々の任務は――」
レインがそう言いかけると、
「――ハーヴィッチは、麻薬を専門に取り締まる、国際特殊捜査機構です」
「そ、そうです」
急に横からヴァンが発言したので、レインは少し驚き、戸惑った。すぐに話を合わせる。
家族は、ヴァンの姿を怪訝そうに見ている。
「……このような姿で失礼。私は、紫外線アレルギーなのです」
「ああ……」
どうやら納得したようだ。それですぐに納得できるものかと、レインは軽く戸惑う。
「お子さんですか？」
レインは、ベッドの上で死んだように眠っている男子を見た。ひどく顔色が悪い。青ざめている。その割に大量に汗を掻いている。熱でもあるのだろうか？
「ええ、息子です」
「息子さんが麻薬を使用していたことは、ご存知でしたか？」
「はい、聞かされました……」
警察から、ということだろう。

「では、話が早いですね。――近頃、青少年の間で国に認可されていない麻薬が蔓延しています。私たちはその捜査のために来ました」
レインは、あらかじめ移動中の車内で口裏を合わせていた内容を説明した。
「はあ……」
納得しているのか、怪しんでいるのか、いまいち分からない反応だった。
「……首の傷を調べたい」
レインの腕を取り、ヴァンが耳打ちした。
「え？」
「……頼む」
「……分かった、なんとかしてみる」
レインは小声で答え、小さく頷いた。
「捜査へのご協力をお願いします。私から詳しい事情の説明と、お子さんの近頃の動向について話をうかがいたいのですが、その際、時間短縮にもなりますので、出来れば、他のご家族共々。お手数ですが、廊下にお越し頂けませんか？」
「……分かりました」
母親は頷いた。隣にいた父親も頷く。
「ありがとうございます。我々は麻薬を取り締まることが任務ですので、お子さんを逮捕する権限はありませんから、ご安心を。この会話が裁判などに影響することもございませんので」
「分かりました」
レインに先導されて、家族は廊下に出ようとする。
「……失礼」
ヴァンが途中で止めた。
「なんでしょう？」
「……彼が、我々の追っている麻薬を摂取しているか調べたいので、少しばかり髪の毛を採取しても宜しいでしょうか？」
「え……！？」

髪の毛と聞いて、家族は戸惑った。
「……大丈夫。目立たない程度です。一部の毛先を少しだけですから」
「……え、ええ」
麻薬に手を染めた負い目があるのか、家族は渋々ながら許可した。
「……ご協力、感謝します」
ヴァン一人を部屋に残し、レインと家族は廊下へ。声だけだが、レインが、隣の個室に顔を覗かせて、なにやら話をしているのが分かる。ヴァンは扉が閉まっているのを確認しつつ、そっと、眠っている男子の枕元へと歩み寄った。男子の首筋を見る。ガーゼが張られてある。
「これは……！？」
男子の首筋のガーゼをめくると、太い針で突き刺したような傷跡が二つ見られた。ガーゼが血で滲んでいる。見ると、傷口から、わずかだが出血も見られた。まだ傷が塞がっていないようだ。そして、その二つの傷を中心に血管が浮き上がっているようなミミズばれが起きており、ひどく熱を持っていた。
「まさか……！？」
ヴァンは閉まったままの扉をうかがいつつ、そっと、男子の口に手を伸ばした。指先で上の唇を持ち上げて、口内を見る。
ヴァンの目に映ったのは、二本の牙と化しつつある歯だった。
「吸血鬼化している……！？　彼は、ヴァンパイア・ハーフなのか……！？」
上顎の、犬歯の部分だけが異常に発達し、まるで、牙のように尖り始めている。いまはまだ口を開けなければ目立たないが、これ以上伸びれば唇をはみ出し、目立つようになり、その姿は本当に吸血鬼のようになるだろう。
ヴァンは慌てて個室を飛び出した。
「！？」
表情は分からなかったが、慌てたヴァンが部屋から現れ、隣の個

室に入る様子を一同も見ていた。彼の様子が尋常ではないのは一目瞭然。
ヴァンは順に個室に入り、出てくるや否や、レインの腕を取り、家族の元から離した。
「なんなの……！？」
家族の目を気にしながら、レインは問いかける。
「まずい事態だ」
「だから、なに……！？」
「三人とも、吸血鬼化が始まっている」
「え！？」
ヴァンの言葉に、レインはひどく驚いた。
「夜が明ける前には、ヴァンパイア・ハーフになってしまう」
横目に個室をうかがいながら、ヴァンは焦る様子で答えた。
「まさか……」
「とにかく、すぐに隔離するべきだ」
レインの両肩を掴み、言い聞かせるようにヴァンは言った。
「そんな、いきなり言われても……」
突然のことにレインは戸惑っている。
「事は急を要します。緊急事態だ。あの子たちがヴァンパイア・ハーフとして目覚めれば、手当たり次第に血を求め、数日もしないうちにこの街に住む人間はすべてヴァンパイア・ハーフとなるでしょう……！」
「最悪の事態ね……」
レインは親指の爪をギリリと噛んだ。
「レイン、すぐに彼らとその家族を隔離して下さい」
「家族も……？」
「ええ、唾液でも吸血鬼化する可能性がある。そして、今回の関係者の血液検査も実施して下さい。……出来ますか？」
少し間を空けて、ヴァンは確認するように問いかけた。
「出来るかどうかは分からないけど、連絡はしてみるわ」

そういうと、レインは携帯電話を取り出した。
「お願いします。――ああ、もう一人の少女のことはなにか分かりましたか？」
レインは携帯電話でどこかにかけていた。かけ続けながら、レインは答えた。
「名前と住所が分かったわ。いつも一緒につるんでいたそうよ。彼女の身を案じて連絡をしたけれど、不在だったらしいわ」
携帯電話のマイク部分を指で押さえながら、レインは言った。
「いやな予感がしますね」
「ええ、まったくだわ」
そう言うと、レインは電話に集中し、ヴァンから距離を取った。
「あの、どうかされたんですか……？」
二人のやりとりを遠目にうかがっていた家族は不安になっている。
「……どうしたものか」
ヴァンは少し考えに更けた。いまの格好が幸いし、彼の表情が読まれることはなかった。
「……実は、お子さん方が我々の追っている麻薬を摂取している疑いがあります。それは副作用がひどく、状態が急変する恐れがあります」
ヴァンはその場しのぎの説明をした。
「ええっ！？」
当然、家族は心配する。
「……もっと、専門の病院で検査をする必要があります。その運搬のため、いま、専門のチームをこちらに派遣しているところです。ですから、ご安心を」
「そんな、安心できるわけないじゃないの……！」
家族は興奮する。
「……いますぐ、どうにかなるわけでありませんので、落ち着いて」
「本当なのか！？　おい、どうなんだよ！」
三人の男女のいずれかの父親の一人が興奮し、ヴァンに掴みかか

ろうとする。
「うぐっ」
ヴァンはそんな父親の手を器用に絡め取り、地面に押さえつけた。
「……現時点を持って、彼らの身柄は国の管理・監視対象となります。これは命令です。たとえ家族でも例外はありません。捜査の障害と判断すれば、逮捕も辞さない。ですから、興奮なさらず、落ち着いて行動して下さい。お願いします」
「うぅ……」
ヴァンは父親を解放し、助け起こした。父親は肩を押さえて退いた。
「……すぐに対処をすれば、大丈夫ですから」
ひどく心配した顔をする家族を気遣い、ヴァンは励ますように言った。
「――ちょっと、ヴァン」
レインはいまの騒ぎを察し、駆けつけた。
「なにをしているの？」
今度はレインがヴァンの腕を取り、家族から遠ざかった。
「……姿を見られるところだったので、つい」
「あまり目立った行動は避けなさい。あなたは……なんだから」
レインは、あえてヴァンパイアとは口には出さなかった。
「……分かっていますよ」
ヴァンはゆっくりと、噛み締めるように頷いた。
「話はつけた。緊急時のチームを派遣するって。ヘリでこちらに向かうそうよ。数十分もすれば到着するわ。一応、警察にも応援を頼んであるから、ここは大丈夫よ」
手にしている携帯電話を左右に振りながら、レインは言った。
「さすが、頼りになりますね」
「茶化さないで。――それで、これからどうするの？」
「我々がすべきことは一つです。ヴァンパイア・ハーフになっている可能性が非常に高い、もう一人の少女の身柄の確保です」

「もう一人の少女も、ヴァンパイア・ハーフなの……？」
「少女こそ、というべきでしょうね。さきほど、彼らの傷を見たときに気がつきました。二つの穴の傷のちょうど反対側に当たる位置に、人間の歯型がついていました。つまり、あれはヴァンパイア・ハーフにより咬まれた傷ということです。あの場には確実に、四人いました。そのうちの一人が消え、残りの三人がヴァンパイア・ハーフになり始めているということは……」
「消えたもう一人の少女が、犯人……？」
「その可能性は非常に高いでしょう」
ヴァンは頷いた。あらかじめ、シルクハットを手で押さえながら。
「分かった。じゃあ、その少女の家に向かいましょう。いまはそれしか手がかりがない」
レインは歩き出そうとする。
「レイン」
ヴァンは腕を取り、レインを止めた。
「なに？」
「もし、少女がヴァンパイア・ハーフだったとしても、生かして捕らえて下さい」
「何故？」
「もしかすると、ワクチンが作り出せるかも」
「ワクチン？」
「我々、正統なヴァンパイアとは違って、元が人間だったヴァンパイア・ハーフからは、ワクチンを作り出せる。すでにヴァンパイア・ハーフとなってしまったその少女を、元に戻せる可能性はかなり低いですが、後の三人に関してはまだ見込みがある」
「また初耳だわ……分かった。生かして捕らえるように善処するわ」
「お願いします」
ヴァンはレインの腕を離した。
「今日は、驚くことばかりね……」
レインは疲れたような表情を浮かべ、鼻で溜め息をついた。

「ええ、私もです」
ヴァンとレインの二人は、個室を前にして呆然とする家族らを尻目に、病院を出るべく廊下を進んだ。
病院の外に出ると、そこへちょうど応援として数名の警官が現場に駆けつけた。
「どういうことなんだ！？」
そのうちの一人はグレッグだった。レインが答えようとすると、ヴァンが前に出た。
「……彼らはある伝染病に感染している疑いがある。すぐに専門のチームが来る。家族が彼らを病院から出さぬように見張って欲しい」
ヴァンは適当かつ、この状況に適切な答えを作った。
「伝染病！？　感染！？　そっ、それはどういうことだ！」
「それ以上は言えないの！　……察して」
レインが顔を近づけて、言った。咄嗟のこととはいえ、やはり機転が利く。
「きっ、危険じゃないのか……？」
「……唾液や血液など、感染者の体液にさえ触れなければ大丈夫だ。だから、彼らを部屋から出すな」
「家族も隔離対象よ。同じく病院からは出さないで。必要なら捕らえても構わない」
二人はそれとなく聞こえるように答えた。
「わ、分かった。とんでもないことになったな……」
病院を前にし、グレッグは腰に手をやった。
「……大丈夫。いまなら、数日もすれば笑い話さ」
ヴァンはグレッグの肩に手をやり、苦笑した。
「あんた、ジョークも言えるんだな」
意外そうな顔をし、グレッグは言った。
「……この姿がジョークさ」
そう言い残し、ヴァンはグレッグの前から立ち去った。レインも、彼に対する罪悪感を抱きながら、自分の車に向かった。

ヴァンとレインの二人は、グレッグら警察に後を任し、車に乗り込んだ。
「――あんたらはどうするんだ？」
二人の後を追ってきたグレッグは、車の窓に顔を近づけた。運転席側の窓だ。
「もう一人の感染者を追うわ」
「もう一人？」
「……少女が一人、消えている」
「連絡がつかないの。もう発病している恐れがあるわ」
「応援は必要か？」
「いいえ、専門の人間だけの方がいいわ。すでに連絡はしてあるから、そちらにも専門のチームが行く」
「そうか……必要なら、連絡してくれよ。すぐに駆けつける」
邪魔だと言われたような気分がして、グレッグは表情を曇らせた。だが、すぐに笑顔を浮かべ、親指を立ててみせた。
「ありがとう」
レインはキーを回し、エンジンをかけた。助手席のヴァンは、思い出したようにシートベルトを締める。
車を走らせ、グレッグの元を、そして、病院を遠ざかる。
「彼はいい人ね」
グレッグの姿をミラー越しに眺め、レインは言った。
「ええ。ですから、騙すのは気が引けますね」
「いまは騙しているかもしれないけど、結果次第では、嘘が真実になるわ」
「嘘のままにしましょう。我々の手で」
「ええ、もちろん！」
レインはアクセルを踏み込み、ハンドルを大きく切った。ヴァンの身体がシートに押しつけられる。
二人の乗った車は、もう一人の少女の家を目指し、猛スピードで道を曲がった。

（6）

少女の家は、街の中心部から少し外れたところにあった。
「町外れというほどではありませんが、隣家との距離もある。もし少女が家に帰っているのであれば、幸いなのですがね」
少女の家の前に車を停めた。車内から窓越しに少女の家をうかがい、ヴァンは言った。
「それは、被害の蔓延を防ぐということで？」
レインもまた、ヴァンを間に挟みながら、窓越しに少女の家の外観をうかがう。少女の家は助手席側にあった。
「ええ、それもありますが、万が一、戦闘にでもなったときに、下手に人が駆けつけたりする恐れがありませんから」
もういいだろうと、ヴァンは、シルクハットとサングラスを外し、マフラーを取った。ついでにシートベルトも外した。
「そうね。戦闘になるかもしれない」
レインは後部座席からジュラルミンケースを引っ張り出した。ケースの中には、彼女の装備が一式入っている。
レインは戦闘用スーツ一式を取り出した。
「見ないでよ。淑女の着替えを見るものじゃないわ」
レインはシートを乗り越えて、後部座席に移動した。
「これは失礼」
ヴァンは前を向いたまま、外に視線を集中させた。ハッとして、フロントミラーを横にずらした。一瞬、服を脱ごうとしているレインの姿が見えてしまった。
後ろでごそごそと音がする。着替えをしているのが音と気配で分かる。車内は狭くて、着替え辛いのだろう、しばらくかかっていた。途中で、白い手がシートに伸び、ジュラルミンケースを引っ張り込んだ。
再び、運転席に現れたレインは、すでにプロテクターなどを装着

した、古城に忍び込むときに扮していた姿となっていた。
運転席に戻ると、レインはホルスターなどをつけ始めた。
レインが更衣室代わりにした後部座席には開かれたままのジュラルミンケースがあり、その中に、さきほどまで身につけていた普段着や、ヴァンから借りていたハーフコートが突っ込まれている。
隣ではヴァンも、シャツとジャケットの上から二番目までのボタンを外して、シャツにおいては両袖のボタンも外した。そんな彼の前にはきれいに折り畳まれたコートが置かれ、その上にシルクハットとマフラーが乗せられてあった。サングラスは彼の胸のポケットに差し込まれている。
ヴァンはカジュアルな格好になっていた。
「武器はあるの？　いる？」
そんなヴァンを横目に、レインは問いかける。
「銀製品ですよね？」
「ああ、そうか」
思い出したように、レインは拳銃や小型剣をヴァンから遠ざけた。
「お気持ちだけ。大丈夫。拳闘には少々、自信がありますから」
そう言うと、ヴァンは拳を握り、軽く構えを取った。
「そう」
本当に大丈夫なのかしら……？
レインの目はそう物語っている。
二人は合わせたように、同時に車から飛び出した。
レインはマントの下に手を忍ばせ、銃を取り出した。弾倉を抜いて残弾数を確認した後、セーフティを外して、再び、マントの内側のホルスターへ。
「行くわよ」
レインは力強く歩き出した。
「お願いしますから、間違っても撃たないで下さいね」
その後ろをヴァンが、苦笑しながら同行する。
「信用しろ……といっても無理かしらね」

マントに施されたシンボルを見せつけるようにし、レインは言った。
「いいえ、信用していますよ」
ヴァンは首を左右に振った。
「ふっ。――先行する！」
微笑みを浮かべるレインだが、ふいに笑みを消し、真剣な表情を浮かべて駆け出した。その後ろをヴァンが着かず離れずついてゆく。
少女の家の玄関扉に張りつき、周囲を軽く見渡したレインは、確認するようにインターホンを押した。……応答はない。
もう一度押してみる。……やはり、応答がない。
「蹴破るわ！」
扉から少し離れて、レインは踵を返した。
「――鍵は開いていますよ」
「とっと！？」
身構え、足を上げるレイン。その矢先にヴァンがドアを押して開けた。レインは蹴躓きそうになっている。
「ぶ、無用心ね……」
恥ずかしさを誤魔化すように、レインは眉間にしわを寄せた。
「注意力が散漫ですよ？」
全開になったドアを前にし、ヴァンはお先にどうぞといわんばかりに行く手を開けて、手を差し伸べた。
再び、レインを先頭にして、二人は家の中に踏み入る。その途端のことだ。
「うっ！？」
二人はほぼ同時に鼻を押さえた。
「これは、ひどい血の臭いだ……」
家の中は凄まじいまでの血の臭いが充満していた。
「うう、酔いそうです。私にとっては本当にきつい。鼻がおかしくなりそうだ……」
ヴァンは鼻を指で抓んで、強くふさいでいる。

「まるで、犬にアンモニアね」
そんなヴァンの姿に、レインは冗談めかしたように言った。
「犬ですか？　品種はなんです？」
「そうね、チワワなんてどう？」
「……遠慮します」
廊下の途中に二階に続く階段がある。廊下の先はどうやらリビングに続いているようだ。それらしい入り口が見える。さらに奥にもまだ廊下は続いている。
二人はまず、リビングを目指した。
「暗いわね……」
銃を構え、警戒して進むレイン。
「明かりが消されているみたいですね」
ヴァンは明かりをつけるためのスイッチを探していた。明かりがなく、暗いこの環境においても、ヴァンにはちゃんと見えているようだ。それも、ヴァンパイアの成せる技だろうか。周囲の様子がちゃんと把握しているらしいヴァンをうかがい、レインはそのように考えていた。
スイッチはリビングの入り口にあった。躊躇うことなく、探すことなく、ヴァンはそのスイッチに手を伸ばした。……なにか、ねっとりとしたものが手に触れた。
「うわ……」
ヴァンは嫌そうな顔をした。
「どうしたの？」
「いえ、なにか粘着質な液体が……点けますね」
ヴァンの声を合図に、リビングに明かりが点された。一瞬、目が眩んだレイン。すぐに慣れたが、そんな彼女の目がまず捉えたのは、リビングの中央に倒れている、二人の見知らぬ人物の姿だった。
床が血塗れに……。
「臭いの元はこれね」
レインは床のおびただしい量の血を見つめ、納得した。

「こちらも同じく、血でしたよ」
ヴァンは手についた赤い色をした粘着質な液体を確認しつつ、手近にあったティッシュペーパーで拭き取った。無論、それは血液だった。
見れば、スイッチにもベットリと血が付着していた。血のついた手でスイッチを触れた形跡が見られる。少々乱暴にスイッチを切ったらしく、スイッチの近くの壁が派手にひび割れていた。
「……たぶん、少女の両親ね」
倒れていたのは、二人の年配の男女だった。
「もう、事切れているわ」
死体に近づき、首筋に触れて脈を計ろうとするも、土気色になったその肌の色や、開ききった瞳孔を確認し、レインは脈を計るのを諦めた。
「見れば分かります。失血死だ。全身に傷が見られる。血を何度も吸われたのでしょう」
「惨いわね。まさか、自分の娘に……？」
レインは近づいてきたヴァンを見た。
「一度、ここで血を吐き出したようだ」
ヴァンはレインの横を通り過ぎ、ある床の前に立ち、指差した。そこにもおびただしい量の血が溜まっている。しかし、それは死体が沈んでいる血溜まりとは繋がっていない。
「血を吐いたの？」
「ヴァンパイア・ハーフになった人間の初期段階によく見られる症例です。まだ、血液に対して免疫が強く、大量に摂取すると身体が受けつけず、このように吐き出してしまうのです。林の中にあった血痕も、多分それでしょう。臭いを嗅いだとき、胃液独特の臭いがしましたからね」
ヴァンは採取した腐葉土を見せた。
「どうして、黙っていたの？」
「まだ、確証がありませんでしたから」

ヴァンはちょっと申し訳なさそうな顔をする。
「そう」
レインはすぐに、過ぎたことだと言わんばかりの顔をした。
「きっと、少女はまだこの家の中にいるはず。血液の一部がまだ新しい。血を吸ってそうまもない。ヴァンパイア・ハーフになった人間は、その状態が進むと、光を極端に恐れるようになります。さらに進行すれば、太陽光の直射を受けるとひどく興奮し、皮膚が軽い火傷を負う。まさに紫外線アレルギーのように。灰になったりはしませんがね。だから、いまは光を恐れる段階のはず。夜にならなければ、彼女はこの家から出られない」
「そう、了解！」
レインは身構えた。
「レイン、分かっているでしょうが――」
「生かして捕らえるわ」
ヴァンの言葉を途中で遮り、レインは答えた。
「お願いしますね」
「それで？　具体的にはどこを探せばいいの？」
「光の当たらないところです」
ヴァンはリビングの明かりが遮られている場所を指差した。
「暗がりってことね」
「はい。気をつけて、いまの彼女は興奮状態にあるはず。説得が通用するような相手ではありませんよ。まるで、手負いの獣です」
「それを、生かして捕らえろと？」
レインは眉を顰めた顔でヴァンを見た。
「ええ、無理を承知でお願いしています」
ヴァンは肩を竦めた。
「本当、無理難題ね」
レインは呆れたように首を左右に振った。
「私は二階を探します。あなたは一階を」
ヴァンは天井を指差した。

「手分けってこと？」
「ええ、夜が近い。外に出られたら厄介だ。もうあまり時間がない」
「分かった。――一応言っておくわ、気をつけて」
リビングを出ようとするレイン。途中で足を止めて、彼女は振り返った。
「ええ、あなたも」
二人は別れた。
ヴァンは二階に上がり、レインは一階を重点的に探し始めた。
小型剣を右手で握り、左手に銃を構え、レインは、リビングから通じる部屋を一つ一つ確認して回っている。人間が入り込めそうなわずかな隙間も念入りに調べる。
リビング、キッチン、応接間と、順に調べて回る。
廊下の奥には物置部屋があった。
「……」
レインは銃を構え、警戒しながら、物置部屋の扉に手をかけた……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6463z/

ヴァンパイアif

2011年12月28日03時45分発行